

---

# RAN&JUMP

月明かり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R A N & a m p ; J U M P

### 【Nコード】

N 8 5 4 5 C

### 【作者名】

月明かり

### 【あらすじ】

夏休み最終日からいたって普通(?)の高校1年生の拓也は……  
…忙しくなっていました

## 第1話（前書き）

小説初作品です（  
^）

（楽しんでいただければ嬉しいです（^  
-

## 第1話

高校生活初の夏休み  
今日が最終日である

俺、椎名拓也しいなたくやは今病院から帰ってきたのだが……

只今の時刻…午後5時  
俺は自宅のドア付近にいる

引越し屋さん……

なぜ我が家に荷物を運んでいるのですか!?

なぜに?

Way? (あつてるかな?)

しばらく呆然として作業している人たちを見ると……………

「あら!おかえり」

母の椎名佐知子さいちこが俺に気づいた

「ただいま……………あの荷物共は何さ?」

当然の質問でしょ？

だって引っ越しの荷物が家に運ばれてるんだから

「ああゝ……アレはね」いや！

何その悪魔みたいな笑み！？

特に目がヤバいつて！！

「明日から家に住むことになった人の荷物よ」

……はい？

一瞬でフリーーーズ

「聞ってるの？」

強制解凍

「き、聞いてますとも！って何で今頃言う！？」

「母さんも今さっき父さんに聞いたばかりなの」

あのクソ親父が……！！

とりあえず気になったことを質問するか

「で？誰と一緒に住むのさ？」

なんで考える？

忘れたのか？

あ…思い出したみたい

「教えない」

クソ婆！

なにがだ

なんて言ったらこの世から俺の存在がなくなるな……

教えてくれないのならば……

「親父に聞くのみ！」

俺はリビングに居るであろう親父のもとに急ぎ足で向かった

『ひとまず質問して殴ろっ』  
なんて考えながら

母さんすれ違う時にニヤリと不適な笑みを浮かべていたことに気づかず……

## 第2話

親父よ……………

何があっただんだ？

リビングに入るとそこには……白目で鼻と口から赤いモノだしている我が親父、椎名<sup>こしき</sup>光輝が気絶していた……………

一瞬死んでいるのかと思ったぜい（汗）  
と・に・か・く起こすか？

台所で水をコップに入れ親父の顔に落とす……起きないですねえ、  
試しに男の急所を蹴ってみるか？  
力を多少抜いて……

《ボフ》……………起きない

《ドサ！！》

つと何かを落とす音が後ろから……

つておい！！引っ越し屋さん…アンタが反応してどうするアルか？  
しかも『痛い』と言ってるような顔してるし（汗）

そして親父よ……なぜ今の荷物が落ちた音で起きるアルか？ 謎だ  
……。

「拓也 私は何をしていたのだ？」  
俺は一度溜め息をして

「気絶だけど……なんで気絶してたのさ？」  
と答える同時に質問をすると親父は

「ちよつと母さんに明日家に来る人のことで話したら」

足が震えてる

「『話しするの遅いんじゃないんですか？』って言われて……」

泣きそうな顔するなよ…

「殴られて気絶した……と？」



「違う！質問にすべて答えた後に殴られて気絶したんだ！」

順序なんてどうでもいいですよ？

「あのさあゝ明日から家に他人と一緒に住むって言うのは遅すぎだと俺も思う。あとなぜその人は家に来るのさ？」

「その子の両親に頼まれたんだよ。なんでも1年間海外に仕事で親2人共家を空けるらしい。それで預かってってくれて」

「なるほど……」

今の会話でわかったことは家に来るのは大人ではなく子供であることぐらいだな

「でもその子は嫌がってないのか？」

嫌々で家に来てもらうと正直色々と面倒だ

「それなら心配はないぞ？嫌がるどころかむしろ喜んでいた」そうか……ん？

「……なんで喜ぶんだ？」

赤の他人の家に行くのに嫌がらないとしても普通は喜びはしないないだろ？！

「それは…ひ・み・つ」

やべえゝ殴りてえ……まあゝここは落ち着こう

「じゃゝ質問を変えよう。どんな子が来るんだ？」

親父は「うゝん……」と声を出した後すぐに『閃いた』と言う顔を  
して

「ひ・み・つ」

などと言いやがった

「眠るがiiiiiii！」

と叫びながら俺は親父の顔にマジで必殺右ストレートを決める親父は  
「ぶべー!!」

と言っなり気絶しやがった

### 第3話

結局あの後親父は1時間ほどで目を覚まし（実は母さんに叩き起こされた）母さんと2人で経営する店に行った

俺はいつものようにテレビを見たりしていたが明日に備えて早めに寝たのだった

そして今、朝起きて学校に向かっている

「タク〜!!」

後ろから俺の名を呼びながら走ってくる奴の名前は真田健太さなだけんた

俺の親友&幼馴染み

運動神経抜群で頭も良く女子に人気がある

ちなみに父親は真田病院の委員長で俺の担当医であったりもする

「ケンおはよう」

「膝は？」

「バッチグ〜」

「それは良かった」

この後2人の会話は自然と夏休みの出来事変わり学校まで話は続いた

1 Cが俺のクラスだ（あとケンも）

席は窓側の端の列の後ろから2番目だ  
ちなみに後ろはケンだ

「おっはよー健太！あと拓也」  
俺はついでかよ！？

笑顔で挨拶してきたのは俺の隣の席である内村瞳<sup>うちむらひとみ</sup>  
髪は茶髪で少し長め  
顔は可愛いと言っより綺麗の方があっている

「おはよう瞳」  
笑顔で返事をするケン

「うーす」  
適当に返す俺

「ねえねえ今日どうする？」 「僕はいいけど……タクは映画どうする？」

「……………行く」  
「拓也ー今の間はなによ？」

君たちのイチヤイチャしている横で映画を見るか見ないか悩んだですよ

気がつくといつの間にか隣にいた瞳はケンの隣に座ってるし

神業だな……

このクラスは男子が20人で女子19人であるためケンの隣は誰も

いないが休み時間は大体今のように瞳がケンの隣に座っている

そして俺が後ろを向いて3人で会話をする

## 第4話（前書き）

予定よりはるかに長くなっちゃいました

## 第4話

チャイムがなり担任が入ってきたが依然俺たち3人は（俺後ろ向いてます）映画の話を続けている

担任はなにやら話しているが……

クラスの半分以上の生徒は聞いていないな

「……で今日このクラスに転入してくる子がいます」

転入生ねえ……

「転入生だつてよ」

「俺興味なし」

「僕も興味ないかな」

「2人してツマンない」

悪かったですねツマンなくて

「さあゝ入ってきて」

担任が手招きするとドアが開き転入生が入ってきた瞬間……

男子共がなにやら

「可愛い」

だのなんだの言い騒ぎだした

後ろを向いていても現状から女の子だとわかった

「このクラスの男子って単純だよな」

瞳の言葉に苦笑しているとケンが転入生を見て驚いた顔になった

「どうした？ケン？」

俺の声でハッと何かを思い出した顔になったケンが不意に

「2年前の薫かおるとの約束……アレを教室でしたらヤバイよね？」

と真顔で言ってきた

瞳は何話しか分からず首を傾けているが俺は真顔のケンに対して真顔で

「当たり前だろ？」  
と答える

しかし何で今薫との約束の話が？



「……靴ひもは…うん…きちんと結んでるね」

「おいケンどう」

「初めまして。今日このクラスに転入することになりました堂本薫どうほんかおるです」

……へ？

………薫？

堂本薫！！？

俺は驚いて前を振り向く

そして転入生の姿を見て自分の知っている薫だと分かり、さらに驚き、思わず

《ガッツ！！》

と音と共に立ち上がってしまった

「椎名どうしたんだ？」

担任の言葉など耳に入ってもいない

あ……薫と目があった

ヤバイ…薫の顔がメチャクチャ笑顔になっていく

「……っ！タク！」

ケンに呼ばれさっきのなぜ薫との約束の話を急にしたのかを理解できた瞬間

「タ…タクちゃ…ん！！！」

薫が俺めがけて走ってきた

ヤツツバ~~~~い!!

ここで薫との約束を果たすと俺の寿命が…………高確率で縮む！  
又は魂消滅!!!

そんなことあったまるか!!

死にたくないその一心で俺は窓から外に出て走って!!!!!!!!!!

……………逃げた(泣)

……………が!

薫は諦めず窓から出てきて 「タクちゃん待ってよう!」などとホザきながら追いかける

『ヤバいロックされている!?!』

「ゴメンね瞳。ちょっと僕も行ってくるよ!」

「え?ちょっと健太?」

健太も窓から出て走って2人を追っかけて行った

3人が出て行った教室は静まりかえっていた

## 第5話

現在…逃げることをやめ体育館裏にいる

そして俺の目には大泣きしている薫とそれを宥めるケンの姿が映っている

「タクちゃんが約束やぶったあゝ！」

「俺が悪かったから泣きやんでくれ……頼むから」

結局薫が泣き止むのに32分52秒かった

もしケンがこの場にいなければかなり時間がかかっただろう…  
…ありがとなケン

「……落ち着いた？」

「うん！」

元気100%ですね

「とお!!」

「ゲッフ!……」

座っている俺の腹に薫のタックルが見事に決まった

痛いってレベルじゃないら……

嘔吐しそうなレベルだぜ

「約束もってよね」

「……わかったよ」

その上目遣いはレッドカードです

いまだ俺に抱きついていている薫の背中に両腕をまわす………

……………今抱き合ってますが何か問題でも？

これが2人でした約束だから仕方ないですよ

なぜこんな恥ずかしい約束をしたのかって？

それは後ほど……

「じゃー僕誰も来ないように見張ってるね」

ケンは背中をこちらに向け離れたところに移動した

「さっきは逃げて悪かったな…教室ではこれ…できないんだ」

男子共に殺されるから

「もういいよ…タクちゃんが今約束守ってくれているから」

「そっか…」

「うん……」

あらためて薫を見てみると可愛くなったと思った

もしかして昔から可愛かったのか？

――――

抱き合っている状態で10分が経過した

「もういいだろ？」

「あと……少しだけ」

20分経過……

「流石にもう……」

「まあ……だ」

30分経過………

「おい……離れろ！」

「やだ！」

無理矢理離そうにもビクともしない………

クソッ！

こうなったらケンに助けを……ケン？

何処に……いるんだ？

ケン？

……

ケンよ……貴様……

……

……

逃げたな？！

俺は10分後薰引き剥がし2人で教室に戻った

男子（ケン以外）が殺意のこもった目で俺を……って女子よ……何で  
今にも泣きそうな顔で俺を見ているのですか？？

「ああ、君たち2人と真田はホームルーム終了後職員室に来るよう  
に」

ですよね……

## 第6話

担任にメチャクチャ注意されました（泣）

職員室を出ると瞳がもの凄い形相で俺らを待っていた

「もう何やってるのよ？後で説明しなさいよね（怒）」

怖い……

「と、とにかく映画見に行こう」

「そうだな」

………ん？

薫が目を輝かせながら俺を見てる……

まさか

『私も行きたい』

なあゝんて言わないよね？

「私も行く!!」

ビンゴーーーー!!？



「どうする瞳？」

「私はいいわよ？堂本さんと仲良くなりたいたいから」

「じゃー決まりだね」

おいコラそこのカップル勝手に決めるな！！

横にいる薫は、なぜか疑問の表情になっている…

どうした？

「ケンちゃん」

「なに？」

「この人誰？」

ああゝなるほどね

「僕の彼女だよ」

「ええ！？」

薫驚きすぎだ……………

それでケンに失礼だぞ

「私は内村瞳。瞳って呼んでね」

「うん じゃー私のことも薫って呼んでね」

「うん。よろしくね薫！」

「こちらこそよろしくね瞳」

「あのさー……自己紹介はそこまでにして映画見に行かないか？」

「「イエッサー!!」「」 誰だお前ら？」

「ひっぐ……ぐすん」

まだ泣いてるよ……

今映画を見終わって家に向かっているのですが…

「いつまで泣いてるんだ？」

「だってジョンがあゝ」ジョンとは今し方見た映画の主人公で簡潔に言えば恋人をカバって死んだのだ……

それを悲しむのは大いに結構だがいい加減泣きやんでほしい……

先ほどからすれ違う人々に痛い目で見られているんですよ？

俺だけが!!

しかも

「あんな可愛い娘泣かして」

「彼女可哀想……」

などが耳に入ってきた

俺が泣きそうですよ……

どうこうしているうちに家に着いた

「ただいま」

なぜお前が言うの？

「おかえり薰ちゃん」

母さん何普通に答えてるの？

「拓也なにしてるの？早く上がりなさい」

薫に付いて行くようにリビングに入った

「叔父さん久しぶりです」

「久しぶりだね薫ちゃん」

などと話をしている

急に薫が俺の方に振り向きワザトらしく

「コホン！」

と咳き込む

「……………なんだ？」

嫌な予感が……………

薫は眩しいくらいの笑顔で

「今日から椎名家にお世話になります堂本薫です。よろしくお願いします」

……………ナンダッテ？

「ははは！ビックリしただろう？」

このクソ親父！

「もう1度眠れやあゝゝ！！！」

「……で？薫は何で黙ってたんだ？」

ちなみに俺の足下には気絶中の親父がいる

「だって叔父さんが『拓也には内緒でお願いね』って」

じゃねえ！！

「まったく……まあとにかく誰にもここに住んでいることは言わないよ？OK？」

「ええ！？」

「わかったな？」

「はあい……」

顔が納得していない

「はあゝ……腹減ったな……母さんメシまだ？！」

「はいはい」

母さん……

親父実践するよ？

まあいいか？

メシを食べ終わり、風呂に入った後に薫と昔話で盛り上がった

「いい時間だな寝るべ？」そう言うとお互い部屋に戻ることにした

薫の部屋は俺の部屋の隣にある

「おやすみタクちゃん」

「ああーおやすみ」

そう言うとお互い部屋に入った

ようやく長い……ほんとに長い1日が終わった………が！

『明日も何か起きそうだな』

と寝る間際までそう思わずにはいらなかった………

## 第7話（前書き）

健太からの目線です

## 第7話

「おはよう」

僕、真田健太は前を歩いている2人に声をかける

「おつす」「おはようケンちゃん！」

前者はタクで後者は薫の返事である

薫が引越しをするまでは毎日3人でに通学していた

だから今3人で歩くことに懷さ感じる

……あれ？急に2人でヒソヒソと話を始めちゃった  
あ……終わったみたい

「ケン今これから言うことは他言無用で頼む」

「隊長殿！何でありますか？」

「実は薫は今家庭の事情で俺の家に住んでいる」

「……それは誰にも言えないね。いったらタクが三途の川渡ること  
になるからね」

「ねえねえ三途の川ってなあに？」

相変わらずだね薫は（笑）



「三途の川ってというのはね……………」

いつも笑顔だけど、よく僕らを困らせる薫

そんな薫が居るからかな？呆れた顔をしているけど、いつもよりタ  
クは楽しそうだ

会話はごく普通だったけれど僕も今朝はなぜか楽しく感じられた

教室に3人で入るとなぜかザワつき始めた

たぶんタクと薫と一緒に学校に来たからであろう

タクは顔がいい+高身長で誰にでも優しい

そのため女子によくモテるがかなりの鈍感だ

薫の顔は可愛らしくて、身長は普通の女子ほどだ

こちらもタクと同じく鈍感だ

ちょっと話が逸れちゃったな……………とにかく今は昨日の事で『椎名  
拓也と堂本薫は親しい仲だ』と噂になっていたから、たぶん其れだ

ろう

現にタクは男子に殺意のこもった目で、また女子に泣きそうな目で見られている

一方で薫は女子数名に睨まれている

まあ鈍感な2人は

「何でみんなこっち見ているのいてるのかな？」

「俺を見ている男子共はわかるが女子は何でかは分らん」

なんてこと言ってるよ

まあ仕方ないかな？

## 第8話

「タクちゃん帰ろ」

薫が俺に、俺が薫に話しかけるたびに皆さんざっつかないで下さらない？

「はいよ……あ！」

……忘れてた

「なに？どうしたの？」

「今日は病院行かなきゃならん。よって一緒に帰れない」

「………付いて行っちゃダメ？」

キター！！ その上目遣い反則だって……

「行ってもつまらないぞ？それでも行く？」

「それでも行く！」

「はいはい。じゃー行くべ」「行くべー！」

真似をするな……！！

「ケン、また明日な」

「うん！また明日」

「瞳バイバイ！」

「ばいばい」

「最近痛みは？」

只今……真田病院の医院長で、俺の担当の真田剛<sup>つよし</sup>先生によって診断中……ぶっちゃけケンの親父

「とくにないです」

「そうか！でも無理してはいけないよ？あと強い衝撃を与えないこと。いいね？」

「はい」

また無理してあんな思いするのはゴメンだ

「では今日はこれまで。次は2ヶ月後に来てね」

「ありがとうございました」

おい………薫よ

たった5分の診断の間で寝るな

現在俺の目の前にはイスに座って口を開けて寝ている薫が居る  
まったく…コイツは

「おい薫！起きろ！」

「ふにや？タクちゃん終わったの？」

「おう！ほら帰るぞ」

「はあゝい」「さっきまで（5分間のみ）寝てたのに元気な奴やな

「膝どうだったの？」

「特に異常なし。ただ無理しないこと。また強い衝撃を与えないことだよ」

「そう……無理しちゃダメだよ？」

「へえゝい。」

「分かれば宜しい。」

「調子に乗るな！」

薫の頭を軽く叩く  
すると薫は頭を押さえながら

「もう！」

なんて言って頬を膨らます

その一つ一つの動作が可愛く見えて………ってなに考えてんの俺？  
？！

「タクちゃん？どうかしたの？」

「え？なななんでもないぞ？」

ヤバい冷静になるんだ俺！！！！

「ほんとに？」

そんな疑いの目を向けるな  
さらに動揺しちまうじゃねえか！

「ほ、ほんとにほんと。さっさと帰るぞ」

案の定…声が裏がえった

恥ずかしさのあまり歩く速度を上げた

「待つてよおー！」

この後は普通の………ほんとに普通の話をしてながら帰った

でも他の人と話しているより、薫と話をしている方が楽しい

.....  
何でかは解らない

.....  
いや本当は解っているのかも知れない

## 第9話

私こと堂本薫は転入して2週間がたちました

いまさつき学校は終わったんだけど……

「あ………今日は用事があるから先に帰ってくれ」

「え！？……あ！わかった」

私は心の中で『またなの？』と呟いた

「悪いな」

タクちゃんは顔の前で手を合わせながら謝ってきた

「タク…用事があるなら早く行かなきゃマズいんじゃないの？」

「お、おう！じゃ～なケン」タクちゃんは走って教室を出て行った

「拓也つてさあ～……週に2回程『用事がある』つて言つては走つて帰るわよね？」

そうなんだよね

用事つてなんだろう？

家に帰ってきてから聞いてみても別の話をして誤魔化されるちゃうんだよね……

「うん……瞳は用事が何か知らないの？」



瞳は首を傾けて

「バイトじゃないのよね？」と聞いてきた

「それはナイと思う…タクちゃん叔父さんが経営している居酒屋でしかバイトしないみたいだから」

「なんの話し？」

ケンちゃん再登場

「ケンちゃんはタクちゃんは何の用事で帰ってるか知ら

「ボクは何も知りマセンヨ？」

答えるの早くなかった！？

しかもなんで片言&敬語なの？あ……瞳が……瞳がケンちゃんを睨んでるよ

正直……瞳が怖いよ

「健太なにか知ってるわね？」ケンちゃん笑顔だけどスゴイ汗かいてる

「し、知らないよ……あ！僕も用事があるから帰るね」

と言うなりダッシュで教室から逃げてった……

「！……逃げられた」

私もあんな瞳に睨まれたら逃げちゃうと思う

「ケンちゃんは知ってるのかな？」

「たぶん知ってるだろうけど……健太のことだから100%言わないでしょうね」

「そうだね」

ケンちゃんは人の秘密を絶対言わない  
それは昔からそうだった

「ああゝ気になる!!」

瞳はそう叫んですぐに『ハッ!』とした顔になった

「薫……もしかして拓也の用事って彼女とデートかもよ?」

「え?!」

タクちゃんに彼女が!?

用事ってデートのことなの!?

「か、薫??」

「そうなの!?!デートなの?!タクちゃんに彼女いるの!?!ねえ瞳  
!!--!」

「落ち着きなさい!!く、苦しい……………」  
ハッ?!私としたことが…………興奮のあまり瞳の首を絞めちゃった

「ゴメンなさい!」

瞳の首から素早く手を離す

「苦しかった」……………」

「ごめんなさい」

再度謝る

「まあ、許して上げるわ。それに拓也に彼女がいるって話しは今まで1度たりとも聞いたことないから安心して」

「そうなの!？」

安堵の溜息をつく

「はあ……………よかった」

「よかった?そんなに拓也が好きなの?」

「ふえ?!」「あんなに騒がれば誰でも判るわよ?」

「あつ……………」

顔が……………熱いよ

「仕方ない。今度後つけるわよ」

……………え!??

「ダメだよ!!もしタクちゃんに見つかったら怒られちゃうよ!」

「大丈夫だって 拓也が好きなんでしょ?気にならないの?」

「それは……気になるよ」

「じゃ〜決まり」

何かとんでもないことになっちゃったよ……………

## 第10話

とうとう

「腕<sup>うで</sup>になるわ」

この日<sup>ひ</sup>が

「ええ」と……………あつたあつた はいサングラス……………って薫？」

来<sup>き</sup>ちゃったよ（泣）

「薰！」

「ひゃい！？」

「もうすっかりしなさい！」

ただいまタクちゃんを尾行中

「やっぱやめよ？ね？」

「……………」

無言の殺意が……

「やりましょう」

「それではサングラスつけて……………レッツゴー」

なんで瞳はそんなに楽しそうなの？

『どうか…タクちゃんに見つかりませんように』

私は心の中で神様に祈った

「神なんて存在しないわよ？」

サラリと存在否定？！

ってさっきのは心の声だよ！？？

瞳が怖い

「どこに向かってってるのかしら？」

「歩いて15分はたったね」

本当にどこに向かってるんだろ？

「薫はいつ告白するの？」

「ななな？！！」

「声が大きい！」

「あわわわ……」

あ………タクちゃんが止まった

ポケットから鏡をだして髪をセットし直している

「これは絶対に女と会っわね」

………そんな

イヤだよ………

「もおゝほら気合いを入れる」  
瞳が背中をたたく

「……………はい」

無理だよ

タクちゃんに彼女が居るなんて

私耐えられないよ…………

ヤバイ泣きそう

あ！……………タクちゃんが角を曲がった

「見失うといけないわ！急ぐわよ」

「うん！」

《ドン》

角を曲がったところで誰かとブツカった

早く謝らなくちゃ

「すいまあああ？！」

「……………マズいわね」



私がブツカったのはタクちゃんだった

てかなんで瞳はそんなに冷静なの？

あれ？タクちゃんが笑ってる

もしかして怒ってないのかな？

「なんで君たちが此処にいるのかな？サングラスなあゝんてつけてさ」『怒』のオーラがでまくっている  
間違いなく怒ってるよ

もう逃げ出したいよ……………

## 第11話（前書き）

今日明日であと5話程更新したいと思います

## 第11話

ああ~~~~~神様

どうかお助けを…………

「さて何で君たちは此处にいるのかな？」

何か言わなくちゃ！！

「え〜と…………た、たまたまだよ！ねえ瞳？」

「尾行してたのよ？何か問題でも？」

ひとみいいい??！

「へえ〜尾行ねえ…………何でそんなことをする？」

まだタクちゃんは笑顔だ  
でも眉が『ピクツ！』と動いた

「週に何度か用事で急いで帰るから怪しいと思ったからよ。でも安心して。用事って何のことかわかったから」

「へえ〜…………」

「ズバリ彼女とデートでしょ？」

「……………は？」

「だから彼女とデートなんですよ？」

瞳の言ったことを私が言い直す  
するとタクちゃんはいきなり笑いだした

「ハハハハ！なんだよソレ？全然違うぞ？」

「え！？違うの！？」

私と瞳の声が完璧にハモった

「だって拓也あんたさっき鏡だして髪をセットし直してたじゃない！？」  
「そ、そうだよ！！」

「ああ、アレは……………」

――15分程前――

『何か後ろから聞き慣れた声が……………気のせいかな？』

約10分経過

『また聞こえた気が……………確かめるか』

俺は歩くのを止めてポケットから鏡をだし、髪をセットし直すフリ  
をして鏡に映し出された後ろの状況を確認する

『アイツ等……………つけてきたな！！』  
鏡には制服にサングラスといっ

た奇妙な格好をした薫と瞳が映っていた

『とっつかまえてやる!!でもここで振り返っても逃げられるしな  
く……………あの角を曲がって待ち伏せるか……………』

—————

「というわけ」

「何だ……………ああくくもう!!拓也の彼女みれると思ったの  
に」

「俺生まれてから16年間1度も彼女つくったことナイから」

「本当なの!?タクちゃん？」

「嘘を言ってどうなるよ？」

よかった……………

私は心の中でそう呟いた

「じゃく用事って何だったの？」

瞳も首を縦に振っている

「はあく……………ついて来ればわかるよ」

## 第12話

「ここなの？」

「そうだ」

私と薫は拓也の用事がある場所に着いて驚いた

なぜならそこは拓也と健太が通っていた中学校だったから

「たくちゃん……此処にどんな用事があるの？」

私がしようとした質問を薫が先に拓也にする

「バスケ部のコーチ頼まれてんだよ…ほら行くぞ」

拓也はそう答えて早歩きで体育館に向かった

「さあゝ声だしていこう!!」

「」「」「はい!」「」「」

私たちが着いた時にはすでに練習が始まっていた

拓也が来て嬉しいのかみんな笑顔になった

「椎名先輩」

そう拓也を呼びながら部長らしき子が拓也に近づいてきた

「膝の調子はどうですか？」

「大丈夫だ。完治に近い状態だ」

「本当ですか！？なら今日の紅白戦に出てもらえませんか？最後にどうしても3年全員が椎名先輩とプレーしたがつてるんです」

え？最後？

「……よしやろう」途端に部員全員が笑顔になった

拓也ただいま着替え中……………終了

「タクちゃん…無理はダメだよ？」

薫はかなり心配しているようだ

「これくらいなら平気だ」

「大丈夫よ薫。拓也が倒れたら私がスグに救急車呼んで上げるわよ」

「倒れないって……それより俺の華麗なるプレーをしっかり見てろ

よ  
」

拓也はそう言ってコートに走っていった

ブザーの合図とともにボールが宙を舞う…………それを拓也がジャンプをし味方の方へ叩く

ボールは見事に味方の手にわたった

私は今我が目を疑っている  
なぜかって？

それは拓也が次々と敵を抜き去りゴールを決めているからだ

「拓也ってあんなに上手かったの？」

「うん 凄いよねえ。膝を怪我する前はダンクできたらしいよ？」

…………マジで？

薫は拓也がゴールを決めるたびに声を上げて喜んでいる  
私はあの質問をもう一度することにした

「薫はいつ拓也に告白するつもり？」



「え！？いやその……」

薫の顔が真っ赤になった

「早めにした方がいいわよ…拓也を狙ってる娘なにげ多いから」

試合終了のブザーが鳴り響いた

## 第13話

「「「「今日までありがとうございました」「「「「

「おう！じゃゝな」

俺は今校門で後輩たちと別れの言葉を言い合っている

「卒業式見に来るからな」

「「「「はい」「「「「

別れ際にそう言い走って待たせている2人のもとに走った

今3人で帰宅中

んでもっていきなり瞳が

「今日が最後ってどういうこと？」

と言ってきた

「3年生に大会が終わるまでコーチを頼まれてたからな。先週、大

会で負けて今日が3年生最後の練習だったから今日でコーチも最後だったってわけ」

「なるほど……」

納得してもらえたみたい

「タクちゃん膝は大丈夫なの？」

「大丈夫って言っただろう？まあ心配してくれてありがとうよ」

そう言っただけ俺は薫の頭を撫でる

「えへへ」

薫は気持ちよさそうに目をつぶる

「あのさあ、私の前でイチャつかないでくださいね？」

「別にイチャついてないだろう！いきなりなんてこと言いやる！？」

「そ、そうだよ瞳！！」なんで薫の顔が真っ赤なのかはメンドクさいのでツツコまない

「薫は本当にわかりやすいわね。顔が真っ赤っかよ？」

「え？あなかあまら」

何かの呪文か？  
それより……

「なにが判りやすいんだ？」

「……………」

え？なに？

俺なんか悪いこと言った？

なんで2人して睨む？

「この鈍感は……………ん？？メールきてる……………」

ヤバいわね」

「瞳？どうしたの？」

よかった話が逸れた

「健太との約束忘れてたわ……………私先に帰るわね！あ！拓也！！！」

「な、なんだ！？」

ビックリした……………」

「明日聞きたいことあるからヨロシク……………」

聞きたいこと？

なんだろ？

「バイバイ！！！」と言っなりタクシーに乗る……………っておい！！  
高校生がタクシーで帰るか普通？？」

「行っちゃったね」

「ああ……聞きたいことってなんだろう？」

「さあ、変なことじゃなければいいね」

「そうだな……まあ、明日になればそれもわかるだろう？それより早く帰ろうぜ？」

「うん」

## 第14話（前書き）

タクの回想編

## 第14話

「で？聞きたいことってなんだ？」

現在昼休み

メシを食べ終わったため昨日瞳に言われた『聞きたいこと』について質問する

「ああー簡単よ？拓也の膝が悪い原因と少し遅くなっただけど2学期初日に起きたあの事件についてよ」

「「「え！？」」」

幼馴染み3人組が見事にハモる

「もしかして言いにくいことだった？」

「そうだね」俺の代わりにケンが答える  
気まずい空気が4人を包み込む

「ああーいいのよ別に？ちょっと気になったただけだから」

気になったか……………当然だろうな  
仕方ない……………

「話してやるよ」

「え？いいの？」

「…………そのかわり誰にも言っなよ?」

「わかったわ」

俺は……あの時のことを一瞬で思い出した

「俺は2年前……………とにかくバスケットに夢中だった」

————2年前————

「拓也飛べ!」

「あいよ」俺は中学生離れたジャンプ力で見事にダンクシュートを決める

「さっすが拓也」

「ナイスシュート!」

チームメイトが俺を次々とほめたたえる

「あつたり前だろ?」

《ズキン》

ん?何だ今の痛みは?

「拓也?…?どうかしたのか?」



「いや何でもねえ」

……痛みがひいてる

この時は少し痛みを感じただけだった……この時だけは

あの変な痛みから1週間がたった

「タク走らないと遅刻だよ！」

「わかってる!!」

我ながら恥ずかしいことにケンが家に来るまで寝ていたのだ

「寝坊なんて珍しいね」

「……実は深夜まで勉強を」

「勉強という名のゲームだろ？」

「バレたか……………」

「当たり前」

流石だな親友

《ズキン》

「……………!？」

《ズキンズキン》

なんだ!？

メチャクチャ膝が痛い!!  
痛みがひかない!!？

「タク?急に止まってどうしたのさ?」

「……悪い忘れ物した。先行っててくれ」

「いいよ。待ってるから」

「いいから先に行け!お前まで遅刻するぞ?な?」

頼むから先に行ってくれ……………

「わかった……じゃー学校で」  
ケン走って学校に向かった

俺は膝の痛みでその場から動けなかった

あれから一ヶ月

膝の痛みは日に日に酷くなっていた

それでも俺は病院に行かなかった

やっと手に入れたレギュラー座を誰にも渡したくなかった

そして……………あの日がやってきた

今日は待ちに待った新人戦だった

ケンが試合を見たいというので一緒に行くことにした

俺は時々襲ってくる痛みを誰にも言わずにいた

《ピンポン》

「母さん行ってくる」

「行つてらっしゃい。あとで応援に行くからね」

……………マジかよ

ドアを開けるとケンがいた

「おつす！！じゃゝ行くか？」

「うん」

家の門を開けケンと歩き出した時だった

《ズキン》

「痛つてええええ！！！」

例の膝の痛みが襲ってきた

今までの痛みとは比べものにならないほど痛い

俺は耐えられず膝を手で押さえながらその場に倒れた

「タク？！おい！！！」

ケンの声が聞こえた

でもその声もスグに聞こえなくなった……………

## 第15話

「……………ん？」

気がつくと俺はベッドの上にいた

上半身を起こし横に目をやるとケンがいた

「ケン…ここは？」

「うちの病院…」

「あれ？なんでだ？」

「試合会場に行こうとして歩き出してすぐに倒れたと同時に意識をなくした」

あ！試合！！！

時計に目をやる

1時3分

急げばまだ試合に間に合う

「試合に行かないと！」

立ち上がるうとした瞬間……………

「いい加減にしろ！！」

ケンに怒鳴られた

ケンに怒鳴られたことは今まであまりなかったので俺はビックリし

て固まった

「……ケン？」

「先生にはさつき電話で行けないことを叔母さんが伝えた。いまから親父にタクが目を覚ましたことを伝えてくる」

ケンは立ち上がった

「スグに看護師が来るだろうからおとなしくしてなよ」

そいつって病室から出ていった

ケンの言うとおり5分もしないうち看護師さんがやってきた

俺は病室から車椅子で診断室まで運ばれた

診察室の扉の前で親父と母さんに会った

2人は何か俺に言おうとしてやめた

俺は2人を残し診察室に入った

「いつ頃から痛みがあったんだい？」

今日の前にはケンの親父がいる

俺が口を開こうとしたと同時に後ろの扉が開きケンが入ってきた

「僕も聞かせてもらっよ」

ケンの親父さんは溜息をついた

俺は2人にありのままを話した

話終わるとケンの親父さんが俺の診察の結果を言い出した

「診察の結果……君の膝から靱帯の部分的断絶が数力所みつかった」

ケンの顔は無表情になった

「靱帯……断絶？」

俺は………自分の身に何が起きているのかわからなかった

「君の怪我はちゃんと治る。ただ……」

「ただ何ですか？」イヤな予感がする

「ただ君の怪我は酷い状態でね………治るのにかなり時間がかかるんだ。」

「え?!」

それはどういこと？

話はそのまま続けられる

「そのため君はもう中学……いや高校でも………」

何を言おうとしてるのだろう？そう思った  
そして次に発せられた言葉に我が耳を疑った  
.....



「バスケットはできないんだ」

## 第16話

「またくるよ」

「ああ」

タクが入院して3日がたった

学校が終わると毎日お見舞いに行く

タクは笑顔だが目は悲しみに満ちていた

僕はそれに耐えられなかった

だから……

「もしもし？……うん………日曜日？………わかった……頼んだよ？」

――――

俺が入院で1週間がたった

『バスケはできないんだ』

ふざけるな！！

なんで俺がバスケをできない！？

「くそ！………」小さな声で吐き捨てたその時だった

《コンコン》

ノックがした

寝ているフリでもしようかと考えたがすぐにその考えをやめた

「どうぞ」

返事をするのとドアが開いた

そこには………

「あ………」

「久しぶりだねタクちゃん」

薫が立っていた

「どうして此処に？」

俺は困惑した

「ケンちゃんに話聞いたの。そして頼まれた……タクちゃん元気ないから会って励ましてやってってくれて」

俺はケンに感謝などしなかった……むしろ怒った

誰にもこんな格好悪い姿を見られなくなかった  
その証拠にケン以外の面談を拒否していた

「これお見舞いの花」

「サンキュー……そこに置いという」

俺が指差した机に薫は花を置く

「なんかわざわざ悪いな」

なんとか笑顔をつくってみせた

でも薫は笑わない

「やめようよ……そんな悲しい笑顔するの………」

バレてる

俺は目線を下に落とす

「タクちゃん…なんでこんな風になるまで無理したの？」

薫は今にも泣きそうな声で聞いてきた

「お前には関係ないだろ………」

「関係なくないよ…私たち幼馴染みだよ？」

ストレスが溜まっていたこともあってつい口が滑る

「幼馴染みっていつでも所詮は赤の他人だろうが…!」

自分でも酷いことを言っているのはわかってる………わかってるけど止まらない

「ひどい………どうしてそんなこと言っの？」

薫は泣き出した

「ひどいよタクちゃん！」

「なにが酷いんだ?! 俺は事実を言ったただけだ!!」

そう薫に言い放つと薫は走って部屋から出ていった

そしてすぐにケンが部屋に入ってきた

「この馬鹿野郎!!」

殴られた

「何しやがる?!」「薫はタクのためにわざわざアメリカ帰ってきたんだぞ?! それなのに何だよ今は?! 薫にアタるな!!」

「……………っ!!」

アメリカから?

俺のために?

沈黙が1分近くながれた

「殴ったのは謝るよ……悪かった」

「もういいよ……さっきの俺はどう考えても殴られて当然だ」そんなことより早く薫に謝らないと

「薫はたぶん屋上だよ……早く行ってあげなよ」

「え？……ああ」

なんでわかった？

まあいいや

「行ってくるよ」

俺は痛む足を引きずりながら屋上を目指した

現在屋上

薫………発見！

「薫……」

「……なに？」

泣いてはいないが怒ってるね

まあ～当然か

「さっきは言い過ぎた。ごめん!」

頭下げようとしてバランスを崩し座っている薫の上に倒れる

「……………」

今俺らは抱き合ってる状態になってます  
なんでかって? 倒れる俺に気づいた薫がかばってくれたからですよ

「う、ごめん!」

俺は薫から離れようとする…………が薫は手を離さない

「か、薫?」

誰かに見られたらヤバいつて!!

「タクちゃん…………泣いていいんだよ?」

「え?」

「バスケでできなくなつて悲しくつて…………でも泣かなかつたんでしょ? ケンちゃんは『タクの奴たぶん泣いてあんな悲しい目になったんだろ?』って言うてたけどそれは違う…………本当は泣いても膝は治らないと思つて泣くの我慢してたんでしょ?」

「どうして……………」

泣いても膝は治らない

だから泣かないと決めていた

驚いた……………」

なぜ薫はわかったのだろうか？

「目を見ればわかるよ……………だって私たち幼馴染だよ？」

笑顔で答える薫

「ああ……………そう……………だった……………な」

視界が段々とボヤケてきた

「泣いてスッキリしよう……………ね？」「あ……………ああ……………」

俺は泣いた

今までにないくらい泣いた

薫は泣いている俺の頭ずっと撫でてくれていた

「スッキリした？」

「うん……………なんかスッキリした」

今は泣きやんで2人でベンチに座っている



「うん目がいつものように戻ってる でもどうしようかなあ」

「なにがだよ？」

「さっきタクちゃんが泣く前に私が泣かされたから、なんかしてもらおうかな」

うつ！言い返せない

「わかった…何をしてほしい？」

「うーん……じゃー今度再会したときに」

「したときに？」

「さっき私がしたみたい抱きしめて」

俺はベンチから落ちた

「なななな、何言い出しやがる？」

「はい指切り」

人の話聞けよ！  
しかも指切りかよ！

「だめ？」

だあゝ泣きそうな顔するな

「わかったよ！ほら」俺らは指切りをした  
終わると薫は立ち上がった

「もう時間だから帰るね」

「え？」

「実は日帰りという約束で親から許可が下りたの」

「そうか……」

薫が帰る

なんか異様にむなしく感じる

「でも大丈夫だよ！来年には日本の何処かに帰ってくるから」

「何処かってどこだよ？」

「わからない……でもいつかまたこの町に帰ってるよ」

「その時にはもう約束忘れてるかもな」  
悪戯っぽく笑った

「大丈夫！忘れられる前に帰ってくるよ……じゃゝもう時間だから」

「またな薫」

「またね！タクちゃん」

最後に笑顔で大きく手を振って薫は帰った

俺は今、薫が居なくなつた屋上に1人で居る  
そして心から誓う

薫や大切な人になにかあつた時

俺は…命に代えても守ると

## 第17話

「以上椎名拓也の昔話でした」

「そんなことがあったんだ……………その……………話してくれてありがとう」

「どういたしまして」

しばし沈黙

ん？ 瞳が俺と薫を交互に見ながらニヤツいてる

「拓也は薫との約束守ったの？」

なんてこと聞いて来やがるんだこの悪魔！！  
仕方ないな…………

ここは奥義……………！

「さあゝて帰るか？」

話を逸らす

地味な奥義ですいませんね

「約束は守ってもらったよ」

あゝあゝ言っちゃったよ  
言っちゃいました横の娘が

「拓也の秘密ゲット！」

悪魔を通り越して閻魔大王だな  
メモってんじゃねえ！

「……帰ろうか？」

「ケン……そうだな」

俺は靴を履き替えている  
振り返るとちょうど薫が靴を取り出した……と同時に何かが地面  
に落ちた

「なにこれ？手紙？」

え？マジで！？

俺は固まった

「薫？どうしたの？……なにそれ？」

瞳が薫の手から手紙を奪い取る  
そして声に出して読み始める

「ええゝなにになに？……」堂本薫様 今日の夕方5時に体育館裏  
でお待ちしています』って……これラブレターだね」

「「ええゝ！？」」

ハモる俺と薫

「今時ラブレターなんてスゴいな」

ケン…感心してる場合か！？

「今は4時52分……薫どうするの？行く？」

なに楽しんでんだよ瞳

ってなに焦ってんだよ俺？

行かないよな？薫？

「行かないよ？」

よし！いいぞ薫

「でも手紙の人が可哀想だよ？会ってきてやりなよ？」

ケン……貴様後で処刑だ

「わかった……じゃく行ってくるね」

薫は走り出した  
止めなきゃ！

「薫！！」

「なあに？」

「いや……なんでもない」

「？」

情けないな俺……

薫は視界から消えてから5秒経過

「ちょっとトイレに行ってくる！！」

「トイレという名の体育館裏ですか？」

「……………はい」

またバレた……  
瞳！笑うな！

「はやく行きましょ?」

まだ笑ってやがる

「ほら! はやく走らないと間に合わないわよ?!」

「わかってるよ! ってもう居ねえ」………」

足速すぎだろ?

「タク…なに焦ってんの?」

「え?」

「いい加減さあ」………素直になりなよ? なんでタクはさっき薫を止めようとしたのか。そして今なんで焦っているのか。自分に素直になれば気づくはずだよ?」

「……………」?

「はあ」………とにかく体育館裏に行こう」

俺は走りながらさっきケンの言ったことの意味を考えた

俺はなぜ薫止めようとしたのか………簡単だ  
手紙の主にあってほしくないからだ  
焦っている理由も簡単だ



薫に恋人ができればイヤだから  
なぜイヤなのかも簡単だ

素直になれとはそういうことか……………

ケン……………わかったぜ

俺は薫が好きだ  
今なら心からそう言える

「薫が好きだ」  
口に出してしまった……………  
横をチラリと見る  
ケンがニコニコと笑っている

「やっと素直になれたみたいだね」

「まあ…なんだ……………その……………サンキュー」

「はいはい」

ケンの処刑は取り消しだな

## 第18話

「瞳誰か来たか？」

「まだ5分前だからきてないみたい」

よかった

……ん？

「なにジロジロニヤニヤと俺見てんだよ」

「実はさっきの話健太の携帯から聞いたわよ」

「……………へ？」

ええ……………！？

「ケ……………ン！」

ケンやはり貴様は処刑だ

「手紙の主が来る前に薫に自分の気持ち伝えてきなよ」

瞳は真剣な眼で俺を見る

「でもよ……なんて言えば」

《ドン》

瞳とケンに蹴られてかなり吹っ飛んだ  
倒れたときに打った腕が痛い

薫と眼があつた

マズい……

「なにしてるのタクちゃん？」

「いやゝいい天気だな」

「へ？」

なに言つてんだ俺？

いや実際に話していいかわからん

薫は困った顔してるし

しかたない言うか！

「あのさ〜」

言うぞ

「うん」

言っぞ

「いい天気だな？」

「はい？」

無理言えないって!!

時計に目をやる

ヤバい3分前だ

もう手紙の主が現れてもおかしくない  
しかたない

言っぞ

ひとまず深呼吸つと

「すうー……っはー」

「????」

なんとか落ち着いた

「タクちゃん？」

「薫…今から俺が言うこと笑わずに聞いて」

いつになく真剣な顔の俺に薫は少し動揺したような気がした

「うん……」

「俺はここに来るまで焦っていた。薫に恋人ができたらいやだから」

「なんで…イヤなの？」

薫の表情から緊張していることがわかる

「それは……」

俺は笑顔で答える

「薫が好きだからだ」

薫は驚いてる

ダメだなこれは…

フラれたな………

「タクちゃん!!」

薫が急に俺に抱きついてきた

「か、薫？」

「私もタクちゃんが好き」

薫の頬が少し赤い

いや、それより……………

マジで？

再度確認

「マジで？」

「マジで」「これは夢か？」

「夢じゃないよ」

ヤバイ……………顔が熱い

『キンコーンカーンコーン』 5時を知らせるチャイムが鳴った  
ギリギリセーフだった

あれ？誰も来てないぞ？  
変だな……もしかして悪戯だったか？

「ヤッホー」

なぜお前らが登場する？

「瞳…なにがヤッホー だ！てか誰も来ないんだけど」

瞳はなぜかニヤニヤしてる

「タクごめんな……薫も」

「なに言ってるんだ？」  
わけわからん

「手紙よく見てみて」

はてな？

「……………」。

特に変わったところは……………！！

「ケンてめえ！これお前の字じゃねえか！」

「え？ええええ？」

俺は怒っている

薫は驚いてる

ケンは謝ってる

瞳はニヤツいてる

……………  
バラバラすぎる  
……………

「ごめん！だってタクが素直じゃないから機会を作ってあげようかなあ」と

反論できない

「上手くいったんだし良いんじゃない？」

黙れ閻魔大王！なんて言えない



とりあえず…礼でも言うか？

俺にチャンスを与えてくれたわけだし

「…ありがとう」

「「どういたしまして」「」

「で？これからどうする？時間も時間だし……」

「タクちゃん帰ろ」

「……帰るか」

「僕らはまだ帰らないから」

2人に別れを告げ帰路につく

途中で公園によってベンチに座った

話をした……

ごく普通の話を……

会話が終わる

「帰ろうか？」

俺は言いながら立ち上がる

「うん…そうだね」

薫も同意し立ち上がる

お互いに目が合った

そして優しい風がふいた時

2人はキスをした

手を繋ぎながら帰る2人………

幸そうな顔で

## 第19話

《ピリリ》

俺は目を瞑りながらも音の根元である目覚ましを止める

「寝みい……」

と言いつつ目を……

此処ベッドの上だよな？

「うわあああ!？」

《ドゴン!》

ベッドから転げ落ちた

「……ん？タクちゃんおはよう」

「『おはよう』じゃねえ！なんで薫が俺のベッドに居るんだよ！？」

そう……目を開けると…目の前には天使のような寝顔で薫が眠っていたのだ

《ドタドタドタ》

《バン!》

「拓也どうし……!？」

先程ベッドから転げ落ちた音と叫び声を聞いた母さんがビックリし

て部屋にきた

でもこの状況を見て固まってる

「……………」。

ヤバイヤバイヤバイ！！

「おはようございます」

なに普通に挨拶してるの薫さん？！

「え？お、おはよう薫ちゃん……………」

沈黙

「拓也…あんたまさか！？」

「違う！断じて違う！」

焦る俺

さらに親父登場

「どうしたんだ？母さん……………拓也とうとう薫ちゃんとヤッ」  
「寝てるクソ親父！！」

俺と母さんの蹴りが見事にヒットする

「ホグワァー?!?!」

親父3度目の気絶

「さて説明してもらいましょうか？」

現在着替えを済ましリビングにいる（親父以外）

「俺も何なのか……目を覚ますと隣で薫が寝てた……って薫！」

「え?!なに?」

「なぜ俺の部屋に……いやいつから俺の部屋にいた？」

返答しだいでは俺が親父の二の舞に……

「ええ〜と…朝5時頃にたまたま目を覚ましてタクちゃんを脅かしてやろうと思ってベッドに入ったらそのまま寝ちゃったの」

いやそこ笑顔で答えるところじゃないから

とりあえず命の心配はなさそうだ

「よかったわ…もし私の考えてることだったなら拓也と父さんはこの世から消えていたわよ？」

なぜに親父も？  
母さんもしかして親父のこと嫌いなのか？……………まあどっちでもいいや

俺は薫が座っている方向に体を向ける

「薫よ……今後このような悪戯は禁止だ。俺が消去されてしまう」

「えゝ……………わかった」

納得しろよ……………  
朝から疲れた

――――――――――

「おはようお2人さん……………タクなに疲れてるの？まだ朝だよ？」

「ケン……………実は朝から……………」

説明中……………終了

「なるほどね。それは災難だったね」  
ケンは苦笑してる

「薫…次したら部屋への立ち入りを禁止するぞ」

「ごめんなさい！もうしません」

「『恋人』っていう関係になったのに2人とも変わらないね」

笑いながら言うな

「1日で変わるわけないだろう?」

「でも昨日キスしたよ」

「……………」

言っちゃったよ

また暴露しやがったよこの娘は!!

「……ハハハ」

笑うしかない

もう笑うしか

「タクちゃん?どうしたの?」

「頼むから付き合っていることとキスのことは誰にも言わないって約束してくれ」

「え!?なんで?!」

自慢する気だったのか!?



「俺がこの世から消えてもいいのなら言え」

「わかった…言わない」

薫は頬を膨らませている  
まったく納得してないな

—————

「3人ともおっはよう！」

朝から元気だな瞳……

「「おはよう」「

「おっす……」」

「ちょっと拓也！なに朝から死んでんのよ？」

「説明するのメンドクさい……ケン頼んだ」

「わかった。実は……」

説明中……………終了

「拓也……言いたくないけど言っね……」ご愁傷様」

「勝手に殺すな！まだ死んでねえ！」

「だって……アレ」

と言って瞳は横に指を指す

「は？なに……俺は死ぬのか？」

「高確率で死ぬわね」

瞳が指さした場所には黒板がある

俺は今わかったよ

教室に入ってなぜ男共に殺意に満ちた目で睨まれたのかを……（なぜか女子たちは涙目で俺を見ていた…なんでかな？）

黒板には『椎名拓也と堂本薫は付き合っている』と書いてあるのさ

泣いてもいいですか？

## 第20話

「タクちゃん大丈夫？」

「タク元気出せ！」

「拓也死ぬな！」

現在放課後

いつもの3人が声をかけてくる

「あのな……心配してくれるのはうれしい……が！」

「「「が？」」」

俺は椅子から立ち上がる

「俺を残して逃げるな〜〜〜！！！！」

————午前中————

「椎名あれマジか！？」

「おい！説明しろ！」

「椎名君……」などクラス全員+他クラス生徒20人ほどから質問責めに……

ただでさえ朝の騒動で疲れたのに……………  
誰だよ？

黒板にあれ書いた奴！！

とにかくコイツ等どうにかしないと

「薫！説明……薫？」

説明するの手伝ってほしいのに……………

……………薫が居ない……………ケンと瞳も……………

居ない……………あ！居た！！……………

……………教室の外に避難してんじゃねえ！！……………あ……………居……………

なくなつた（泣）

「説明しろよ椎名！」

「椎名君どういうこと？」

誰か助けて……………

—————

てなわけで朝から死にかけたワケ

「ゴメンなさい」

「「以下同文」」

これにはムカついた

「薫は許すが……その2人……なにが『以下同文』だコラッ！  
……逃げ足速やすぎ」  
薫を見た後に2人の方向を見ながら叫ぶとすでにいなかった

「タクちゃん帰ろ？」

「ああゝ帰って寝たい」

俺は死人のような目で薫と手を繋ぎ家に帰った

――――

風呂から上がりリビングでテレビを見ていると薫が

「タクちゃん明日ひま？」

なあゝんて聞いてきた

たしかに明日は日曜で暇だ

「ひまだな……なんでだ？」

「映画見に行かない？」そんな上目遣いされたら嫌とは言えん  
はじめから言う気はないけど……

「オーケー行こう」

「やったゝ ありがとう」

「コラ！抱きつくな！！」

母さん達が見てるだろうが！

「えゝ……せつかく彼女になれたのに……」

《パリン》

皿が割れる音が……

キッチンにいる母さんが驚いてる

キッチンの前にある椅子に座っている親父はなぜか笑顔だ

《バス！》

不意に親父が後ろから殴られた（まな板で）

母さん……なぜに親父を殴った？

親父は笑顔のまままで気絶してるし……キモい

「さゝ説明しろ！」

母さんが笑顔で命令する

「……はい」

結局家でも休むことができなかった

## 第21話

「恐かったねあの映画」

「そうか？俺は周囲の目が恐かったぞ？」

「ごめんなさい」

現在喫茶店

さつき薫とホラー映画を見てきたのだが……………

「確かに周りの人たちも叫び声を出していたがお前のは異常だ」

薫は普通の人の3倍うるさかった

おかげで俺は周囲の人から睨まれていた

「だって恐かったんだもん……………恐いの苦手なんだもん」

ホラーを選んだの貴女様ですよ？

もういいや……………

「次どこ行くんだ？」

今日のプランは薫に任せている

「次はね…………秘密　とにかく付いてきて」

――――

ここは……………

「ゲーセン？薫ゲーム好きだったのか？」

「違うよ！目的はアレだよ」

薫が指さす方向には……

「…プリクラ？」

「うん 行こ！」

手を引っ張られ強制連行

――――

「えへへ」

薫は笑いながら先ほどのプリクラを携帯に貼ってる……………っておい！！

「なぜ俺の携帯にも貼る？！」

「2人が恋人である証だよ」

「そうか……………」



なぜか納得しちまった

「あ！タクちゃんアレ何のお店！？」

「あ？あれは……………なんだろ？行ってみるか？」

「うん」

「……………」

「タクちゃん？早く行こうよ？」

笑顔で答えた薫が可愛かったため思わず見とれてしまっていた

「すまんすまん」  
とりあえず謝る

店に入るとアクセサリーがビックリする程置いてあった

「すごいね……………」

薫は驚いてるがそれと同時に目はメチャメチャ輝いている

「薫さん？」

「わぁー！これスゴい可愛いー！！あ、これも可愛い」薫はアクセサリーに夢中

俺は周りを見渡す

よかった……

俺ら以外客は居ないみたいだ

………店員さん笑ってる

でもバカにしたような笑い方じゃなくて優しい感じの笑い方だ

………あり？

どっかで見たことあるぞ？

はて？

誰だっけ？

「久しぶりね。拓也君」

「………思い出した！瞳の姉ちゃんだ！………名前何でしたっけ？」

「え？覚えてないの？晴美だよ」

「そうそう晴美さんだ！この店で働いてるんですか？」

「店長だよ それよりあの子誰？彼女？」

「えゝまあゝ」

「可愛いじゃない！」

「ありがとうございます」

………あり？

そういえばさつきから薫の声が聞こえない

振り返ってみる

居た！！

ん？手に何か持ってる

なんだろう？

「薫？」

「ひゃい？！」

近づいて話しかけると変な声で返事された

「それ気に入ったのか？」

薫の手にはネックレスがあった

形はハート

「うん…まあ………」

コイツが物のことで言葉を濁すときは値段が高いときだ

値段をみる

確かにいい値段だな

「買ってやるよ」

「え？！そんな悪いよ！」

「いいんだよ。俺が薫にプレゼントしたいんだ」

「タクちゃん…ありがとう!!」だかだから抱きつくくなって！  
ここ店だから

ネックレスを買って店を出るときに

「拓也君とその可愛い彼女さん！またきてね」

って言われた（薫にはレジで晴美さんのこと教えた）

「「また来ます」」  
と言って店を出た

家に着くとすぐに薫はネックレスをつけた

「どう？似合う？」

メッチャ可愛い！

……なんて言えないので

「似合ってるよ」

すると薫は可愛らしい笑顔になった

「ありがとう！大切にするね」  
薫が俺の頬に軽くキスをした

俺は顔真っ赤になり  
薫は笑顔で抱きついてきた

俺は今幸せの絶頂にいた  
が母さんが帰ってきたことによって質問攻めにあい  
あえなく破壊された

## 第22話

「拓也！た、大変よ！！」

「瞳…朝からうるさい」

走って教室まで来たのか瞳の呼吸は乱れていた

「そ、そんなこと…い、言うわけ？あんたに関わることなのに……」

「すいませんでした！で何が大変なんだ？」

俺に関わっていて大変なこと………なんか怖いんですけど？

薫の呼吸が普通に戻った

「アイツ等が帰ってくるのよ！」

誰がだよ！

……ヤバイ……… 1つだけ心当たりが……

「まさか……桜と元希じゃないよな？」

どうか違いますように

「そのまさかよ」

「……………」

「??????」

俺とケンは凍りついた  
薫はキョトンとしている

「いつ帰ってくるんだ？」

できるだけ遅くなることを切に願う男組

「今日よ……………」

「みんな久しぶり!!!」俺ら3人は声が聞こえた方向をみる

「拓也元気だった?会いたかったよ!!」

そう言つて1人の少女が飛びついてきた

ぎゃ~~~~~!!

この体勢じゃ避けられね~~~~~!!  
つて薫の目が恐い!!

《ドコ!~!》

瞳が俺に飛びついてきた少女を木製のバット(どこにあつたんだ?)

で叩き落とした

「痛ったあああ！！ヒドいじゃん瞳！」

「相変わらず頑丈ね」

「瞳ナイス判断だ」

「みんな久しぶり」

少女と一緒に教室に入ってきた少年が話しかけてきた

「「元希は歓迎する」」

「ありがとう」

相変わらずクールだな

「ちょっと私は？って誰この子」

視線の先には薫が居た

「私はこの前転入してきた堂本薫です」

「あ、あの噂の？」

なんの噂だよ



「私は吉野桜よ！でこれが田中元希」

「よろしく堂本さん」

「薫でいいよ」おおー！！  
なんて眩しい笑顔なんだ

「おいHR始めるぞ」  
担任が来たので強制的に会話終了

――――

「イギリスに旅行？」

現在昼休み  
事情を知らない薫に2人が説明している  
ちなみに6人で食事中でもある

「そうなの！私達の親同士が仲良くて時々みんなで行くの」  
桜テンション高すぎ……

「俺はコレのおかげで1日1日の疲労が半端ではなかった」

安易に予想できるぜ元希

お前が桜によって死にそうになっている姿がな

「そつえばさっき何で桜はタクちゃんに飛びついたの？」

「タクちゃん！？なにその呼び方は？！どついつこと？」

ヤバイヤバイヤバイ

またアレが始まる

ケンと瞳そして元希は可哀想な目で俺を見ている  
てかちゃんと助けてね

「え？だつて昔からタクちゃんとケンちゃんはそう呼んでるからだ  
よ？」薫は不思議そうに言う

「なあんだ！えくとさっき私が拓也に飛びついたのは久しぶりにフ  
イアンセに会えてうれしかったからよ」

またまた空気が一瞬で凍りついた

気が付くと俺ら以外のクラスのみんなは教室の外に避難してる……

「タクちゃんどついつこと？」

薫の目が恐い！

俺はすぐにケン達にアイコンタクトで助けを求めた

『助けて』

『『『了解』』』

「タクちゃん聞ってるの!？」

怒鳴りだした薫を瞳がなだめる

「違うのよ薫!あれは勝手に桜が言ってるの」

「そうだよ薫」

ナイスタイミングだケン

「何言ってるの瞳?拓也も私のこと認めているよ」

認めてねえ〜

と言う前に薫がキレた

「タクちゃんのバカ!アホ!最低!変態!浮気者!!!」

好きな女の子にここまでボロクソ言われるとさすがにキツイ

特に最後のセリフとかね

「何ヒドいこと言ってるのよ薫!!拓也が」

《ドッジコーン!》

すごい鈍くく大きな音に全員が静まりかえる

「とにかく落ち着いて話し合え」

音を出した張本人である元希は冷静にそう言った

大きな音は元希の拳が黒板を叩いた音だった

## 第23話

「で？桜は本当にタクちゃんのフィアンセなの？」

「そうよ」

「」「」「違う。あり得ん」「」「」

これを人は完全否定と言う

「拓也…さつさとコレと元希に真実教えてあげなさいよ」

瞳には桜が物として見えているのか？

「真実って何？」

「いや〜……………ね」

桜さん……………

貴女様が目を輝かすような真実ではありませんから

「なんなら僕が代わりに言っただけよ？」

ケン…できれば立場を変わってほしい

「いや俺の口から言うよ……………スー……………ハー」

深呼吸して……  
さう言っぞー！！

「『桜は好きだよ。でも友達としてであってフィアンセとかそういうのは無理だ。俺は薫が好きなんだ…薫も俺を好きでいてくれる。今俺と薫は付き合っているんだ。だから諦めてくれないか？』って言おうとしたんだろ？」

え？

「『『は？』』』』元希以外の4人が俺を見てくる

「……………全くその通りです。一字一句たりとも間違いはございません」

「『『……………。』』』」

『『『『元希って……………何者？』』』』

心の方がハモった気がする

「相変わらず人の心読むの得意だね……………って拓也どっいうこと！？」

あなた方は突然首を絞められたらどうしますか？

多くの人は驚き何もできないのではないのでしょうか？

「は、離……せ………」

意識が………

「……………ここは？」

「保健室だよ」

うお？！

ビックリした……

「薰いきなり話しかけるな……ビビルだろ？」

「タクちゃん大丈夫？歩いて帰れそう？」

「歩いて帰れるよ」

帰る？

はて？今何時だ？

6時か……

6時！？

「俺こんなに寝てたのか？」

自分で自分の体の構造疑うわ……  
マジで！

「うん可愛い顔してたよ」

「な、なに言ってたんだお前？！」

「だから寝顔可愛かったよ」

俺はたぶん今顔が赤い状態にあるだろう

……ん？

「」「」「」……。「」「」



なにやら無言の殺意みたいなモノを感じる

あ…………みなさん居たのね

「心配して損したね」ケン！？  
優しいケンがこんなこと言うなんて……

「起きてすぐイチャついてんじゃないわよ」

瞳恐いって！

「ハア……………」

元希？

なんでため息をつく  
ん？なに？

その人差し指の先には何が？

「た~~~~~~~~や~~~~~！！」

ぎ~~~~~~~~！！

桜の後ろに般若が見える

「私諦めないんだから!!.....薫!!」

「ひゃい!？」

またその反応かよ!

「絶対拓也を貴女から奪ってみせるんだから!!」桜は走り去っていった.....

「.....帰ろう?」

俺はそれしか言えなかった

だってみんな啞然としてから

## 第24話

大混乱が起きたあの日から色々（数えきれない）あったが学期考査も終わり冬休みまで残り2日となった

そんな時だった

「今年の冬休みみんなで旅行に行かない？」

「瞳マジで言ってるのか？」

この娘は計画も立てずいきなり何を言い出す

「旅行っていつでも北海道にある私の別荘でみんなで年越さないってこと」

ちよいまちー！

北海道！？

いや！それより…

「お前の別荘なのか？」いい間違いだよな？

「そうよ？何か文句でもあるのかしら？」

「ないです……」

瞳って何者？

知ったら何かとんでもないことになりそうなのでスルーしとこ

「みんなどうする？」

そんなに睨まれたら

「」「」「行かせていただきます」「」「」

断れないじゃん（泣）

「よし決定！！31日から3日間だからね」

みんなで年越しか……  
悪くないな

「旅行楽しみだね」

カレーを作っている薫は本当に嬉しそうに言うてくる

「そうだな…でもその前にクリスマスがあるぜ？」

「ふふふ……どっちも楽しみ」

今年は

いや今年からはこういうイベントは楽しいかも……

そんなこんなで3日過ぎた

現在ケンの家にてみんなでおしゃべり中

「タク明日親父が病院に来るように行つてたよ」

「『ヤベ！忘れてた』だろう？」

「その通り」

「私も明日付いて行くね」

「薫が待合室で寝な」

「誓います!!」

まだ最後まで言っていないのによくわかったね

瞳？

なんで薫の胸もとをジーンツ見てる？

「薰そのネックレスどうしたの？可愛いじゃない」

ネックレスって……

まさか！？

「これはタクちゃんが付き合って初めてデートした時に晴美さんのお店で買ってくれたの」

そんな幸せ顔で言われる俺の方が照れちまうだろうが

「晴美って私のお姉ちゃんのこと？」

「「はいな」」

「そうなんだ……って桜うるさい！！」

《ベシ！》

瞳のチョップがヒットする

「痛あああ！！」

桜は薰がネックレスの話をした後にずっと

「ブーー！！」

て獣みたいに唸ってたから瞳に叩かれても仕方がない

「みんな晩ご飯用意ができたみたいだよ」

ケンはいつもタイミングがいいな

「8時半か…そろそろ帰ろつかね」

「」「賛成」「」

薫の声だけが聞こえない

マジかよ……

「寝てる」

「ホントだ！可愛い寝顔しちゃって。拓也もそう思わない？」

「うん」

あ…つい口が滑った

チラリと4人を見る

瞳ニヤけてる

ケンもニヤけてる

元希ため息付いてる

桜キレ気味の笑顔！？

コワ！

気にしてはダメだ！  
気にしたら負けだぞ俺！

「薫は俺がおぶって帰るから……じゃ！」

俺は逃げるようにケンの家を出た

歩いている間薫は全く起きる気配をみせなかった



## 第25話（前書き）

コメディー要素なしです

## 第25話

《キーー！》

《ガシャン！！》

私はその音に驚きながらも音がした場所に目を向ける

見てみると誰かがトラックにひかれたみたいだ

私は近寄ってひかれた人の顔を見て驚愕した

なぜならその人は私の世界一大切な人だったから

彼の名前を呼ぶ

返事がない

動かない

私は諦めずに名前を呼ぶ

でも私の声は彼には届かない

それでも私は名前を呼び続ける

「タクちゃん!!」

私は叫びながら上半身を起こす  
ここは…私の部屋？

「夢…だったの？」さっきのは夢だったの？

でもとってもリアルだった

もし夢じゃなかったら？

そう思うと怖くなった

私は隣の部屋へ急いだ

そして部屋の前で立ち止まる

もしドアを開けて彼がいなかったら？

イヤだ……

お願いだから居て！！

私は恐る恐るドアを開けた  
《ガチャ…》

……居た

「薫…目が覚めたのか？」

タクちゃんが居る

そのことに安心したら涙が流れた

どうしたのだろう？

今俺の目の前で大切な人が……………薫が泣いている

「薫どうしたんだ！？」

薫に近寄って両肩に手をやる

「タクちゃん!!」薫は俺に抱きついてきた  
まだ泣いてる

抱きしめながら頭を優しく撫でる

「薫…なんで泣いてるんだ?」

「あのね……グスッ!夢をみたの……怖い夢だった」

怖い夢?

「どんな怖い夢だ?」

泣くほど怖い夢だったのだろうか?  
ならなぜ俺を見て泣き出したんだ?

「グスン!……タクちゃんがトラック……」

俺がトラック?

??????

「タクちゃんがトラックにひかれて死んじゃう夢をみたの!」

「……………っ!」

薫は俺がいなくなる夢をみて泣いている

泣いているのは俺がいて安心したから

嬉しかった

薫が俺をそこまで想っていてくれることが嬉しかった

「馬鹿！俺はそんな簡単に死なねえよ」

「……だったら約束して」

泣きやんでいるが涙目だ

「約束？」

「絶対に死なない…居なくならないって約束して」

「約束する…大丈夫。ちゃんと約束は守るよ」

笑顔で答える

「誓いのキスして……」

「ああ」

優しいキスをする

約束を守るための……  
誓いのキスを



## 第26話

「行つてきます」

ドアを開け薫と外に出る

俺は外に出てすぐ薫に手を差しのべる

意外と恥ずかしい+勇気が結構いりますね

「え？あ！もしかして昨日買ったガム欲しかったの？ごめん…家に置いて来ちゃった……」

貴女の頭大丈夫ですか？

まったく……

「誰もガムが欲しいワケじゃねえ！！」

少々怒鳴りながら薫の手をとって歩きだす

「え？……あ」やっと理解したか

「ふふふ…タクちゃんの手温かい」

「そつでござんすか」

そんな可愛い笑顔で言われると俺の血が急激にスピードアップしちゃいますよ？

そんなこんなで本日初めの目的地に着いた

「叔父さん……まだバスケをしてはいけないんですか？」

最近は膝の痛みは全くない

それに単純にバスケがしたかった

「前にも言ったが君の膝はモロくなっているんだ。それに完治していない。体育の授業と違って部活は毎日あるだろう？今部活を始めたら怪我が悪化して治るのにかなり時間がかかるんだよ？わかったね？」

やっぱりダメか……

あと半年待ってみよう

「わかりました。ありがとうございます」

俺は診察室をでて薫を探す

居た居た

「薫……………薫？」

また寝てる

昨日はあの後なかなか寝れなかったみたいだし仕方ないな…

「薫起きな」

薫を揺すると意外とすぐに起きた

「ハッ！？私また寝てたの？」

「寝てたな」

薫は急にソワソワしだした

トイレか？

「タクちゃん怒らないの？私約束破っちゃったし」

約束？

ああアレか

「今日特別に許す」

仕方ないさね

途端に薫は笑顔になった

「ありがとうタクちゃん大好き!!」

また抱きついてきた

抱きつき癖でもあるのかコイツ?!

「馬鹿! 此処病院だぞ!? 抱きつくな! あと大きな声で恥ずかしい  
こと言うな!!」

「それはアンタもね」

こゝこの声は!?

「瞳? なぜにお前が此処にいる?」

どうみても瞳は元気そのものだ

「実は昨日アンタ等が帰った後に桜と元希がヤラカしたのよ」

昨晚

「逃げ足早いわね」

流石ね

と私が感心していると

「拓也帰っちゃった。ガックシ」

桜ホントに拓也LOVEだね

「この際元希に乗り換えれば？」

半ば冗談で私は言った

コレがまずかった……

元希は

「俺が迷惑だやめてくれ」

気のせいかな？

少し元希が動揺したように見えた

「なによぉー！こんな可愛い私が迷惑って言うの？！」

確かにアンタ顔は可愛いよ

ただナルシだからダメだね

「黙れこのナルシスト！」

元希にしては目面しく怒鳴っている

「もしかしてホントは桜が好きだったりして」

「そんなワ」

ケンの発言にキレたのか元希がケンに迫ろうとした時だった……

「元希のバカー!!」

桜に元希が吹っ飛ばされた

その勢いで窓に衝突……

《パリン!》

窓ガラスが割れた

「マジ痛てえ」

痛いのならそれらしい反応してほしいわね

え?この赤いのもしかして……

血?

「「「……。」「」」

「ヤバい…血止まんねー……もしもすいませんが救急車お願いし

ます。住所は　　」

血を出してる張本人は至って冷静だった

終いには自ら救急車を呼びだした

「てなワケで元希のお見舞い……のつもりだったんだけど」

だけど？

「病室で桜と喧嘩してたからやめた」

「ははは……」　　ってるぞ薫

「まあそういう事だからお見舞い行かない方がいいわよ？じゃ私は帰るわね。バイバーイ」

そう言うつと瞳は病院を出てまたタクシーに乗って帰って行った

ひとまず

「俺らも外にでるべ？」

「そうだね」

俺は診察代を払って薫と外に出た

「これからどうすの?」

うん……

それなんだよな

実は薫のクリスマスプレゼント買いに行きたいんだけど本人居るしな……どうしょ?

「私買い物があるからタクちゃん先に帰っててもいいよ?」

チャー——ンス!!

「じゃ〜お言葉に甘えるかな」

「うん じゃ〜ねタクちゃん」《チュ》

薫は俺にキスをして何処かに行ってしまった  
多少薫の顔が赤かったような気がする

「さてと……俺も行くか」

いざ最終目的地へ!



## 第27話

《カランカラン》

「いらっし…拓也君？」

「こんにちは！晴美さん」

そう…ここは晴美さんの店

店名は《HARUMI》

まんまだな……

「今日はどうしたの？可愛い彼女はどこ？」

キヨロキヨロと捜さないでくださらない？

「実は薫に内緒で」

「クリスマスプレゼント買いにきた？」

なぜ後ろから聞き慣れた声が？

「ケン！？なぜに！？」

「瞳へのクリスマスプレゼントを買いに だって前にタクが薫に買  
ってあげたネックレスが可愛くて羨ましがってたから此処で買おう

かなっと思ひまして」

なるほどね

「へえ、瞳そんなこと一言も私に言つてこなかったのに……」  
晴美さん……そんな落ち込んでくださいな

それにしても……………

1つ気になることが……

「何で袋が2つあるわけ？」

「これのこと？」

他に何かあるのかね？

今変な口調だつたが気になさらないで下さいな

「これは元希が前来たときに買おうと決めてたらしくて代わりに買つてきてくれるよう頼まれたから仕方なく……あ！実は元希いま」

「入院中だろ？さつき瞳に病院で会つた時に全て聞いた……って元希誰にプレゼントする気なんだ？！」

「……桜？」

沈黙

「「ないない」」  
2人して笑う

フザケるのはここまでにして早くプレゼント買わないと

でも何買えばいいんだ？

うーん

そうだ！

「晴美さんのお勧めで何かないですか？」

「え？そうね……あ！」

おー！！

何かあるのか！？

「コレなんかどう！？」

「！-！-」

目の前には指輪があった  
綺麗な石が星形となって3つ埋め込まれていた

これだったら喜んでくれるかもしれないな

「コレ下さい!」

「わかったわ プレゼント用にラッピングするってその前に指輪のサイズは?」

ヤバイ……

わかんねえ

え?

ケン?

誰に電話を?

「もしもし瞳? 薫の指のサイズわかるかな? …… うんわかった  
あ  
りがとう …… え」と晴美さんサイズはこれです」

「え? ええわかったわ」

「……サンキュ」

「どういたしまして」

いきなり電話で聞いてくれるとは……

それよりなぜ瞳は薫の指のサイズを知っているんだ？後でメールだな

「拓也くん？ラッピングする？」

「え？あ…お願いします」

「で？いくらなのタク？」

聞くの忘れてた……  
いくらだろ？

「晴美さん…コレの値段は？」

「言わなかったっけ？」

はい  
言ってません  
聞いてません

「実はさっき完成したばかりで値段決めてないのよね〜……………どう  
しよっか？（笑）」

笑うとこじゃありませんよ？

実際

「どつすうと言われましても？な？」

ケンに同意を求める

「だったら…適当でいいんじゃない？」

この人たち異常だ

「じゃゝ適当に4、000円でいいわよ？」

「値段が微妙すぎますって！…てか安くはないですか！？」

「いいのよ？適当なんだし（笑）それにあの子にきつと似合うだろうしね」

ちょっと想像してみる……………

たしかに似合うな

「わかりました…その値段でお願いします」

ラッピング中

終了

「彼女きつと喜ぶよ？なんたって私の傑作なんだから。じゃゝ2人

とも帰り道気をつけてね」

「はい！ありがとうございます」

「どういたしまして またね！」

ケンと一緒に店を出た

「タクどうやって帰るの？」

「歩き…かな？」

「自転車の後ろ乗る？」

「乗る！」

ケンと2人乗りは久しぶりだ

そんなことより……

『早くクリスマスイヴになれ』  
と心底思った

## 第28話（前書き）

元希視点です



## 第28話

「……。」

無言のまま睨み合つて2時間経つた

流石にキツいな

だがここで目を逸らせば俺の負けになる

それだけはイヤだ！

――2時間程前――

「だいたいお前が怪我させたのが悪いだろ？」

怒つていても冷静にならなければ思考が働かない

「元希が迷惑だのナルシストだの言うからでしょ！？」

喧嘩が始まったのは簡単なことだ

俺に怪我を負わせた（右の二の腕と右の脹ら脛を何針か縫いました）  
ことに謝らなかつたことに俺がキレた

そして桜の逆ギレ

「だから俺に謝れ。小学生でもできることができないのかよ？」

「なによ！？私が小学生以下とも言いたいわけ！？？」

「だれも」

《ガス！》

「痛つて（――！！）」

なんだ？

今なにが頭にあつたんだ！？

下を見る

林檎！！？

「あんたらウルサイわよ！ここ病院！！」

「瞳痛いんだけど？」

ハモった……

桜……

貴様あからさまに嫌そうな顔するな！

「そんなに元気ならお見舞いに来き意味なさそうね……私帰るわ」

え？

いやいや、林檎ブツケに来ただけですよん！！

「あと此処病院だから静かにしなさいよっじゃ〜ね」瞳は嵐のように去っていった……

――――

で現在に至るわけ

《ガラガラ》「「!？」」

なぜ窓が勝手に

「や!!元ってちょっと待って!これ!!」

ケン is 迫りくる俺の拳に焦り、なにやら袋を前に出した

「ほら頼まれた例のモノ」

「……………」

俺は無言で受け取る

つて!

「ケン此処3階だよな?」

なぜ外の窓から此処に来れる!?

「此処僕の親父の病院だからこれくらいの「ト」ならで可いよ」

意味不明だ

もう追求するのをやめるのが得策だな

「とりあえず…これサンキュー」

「どういたしまして で？誰にあげるの？」

「誰でも良からう」

「なにその袋の中み？」

「！？？」

《ペシ！》

桜が袋に触ろうとしたので焦ってその手を叩いた

「痛い！なんで隠すのよ？！」

「別に何でも良いだろ？！とにかくコレに触るな！！」

焦っているためか怒鳴ってしまう

「誰にプレゼントするのさ？」

ケンがしつこいのでつい口が滑る

「好きな人にだ！……あ」

言ってしまった

「へえ、誰なの？」

「ケン今すぐ帰れば命までは取らんがど……逃げ足速いな」

瞬間移動並の速さだな

「……………」

なぜ黙ってるんだ桜？  
まさか！？

「帰る」

え？

帰るのか？！

引き止める理由もないし仕方ないな

「わかった気をつけるよ？」

「わかってるわよ。明日迎えに来るから」

そう言って桜は病院を出て行った

桜が居ないと暇だな……

## 第29話

なぜなんだ？

朝までは

《タクちゃん大歓迎》

の文字が

《タクちゃんのみノックすること》

に変わっている……

薫の部屋のドアに掛かっているホワイトボードは書き直されていた

俺何かしたか！？

《コンコン》

「俺だけど？」

沈黙？

あ……微かに何か音が…

「どぞぞ」

機嫌は良いみたいだな

《ガチャ》

「いらっしゃい」

いつもと変わらない可愛い笑顔で薫は迎えてくれた

「な………何で俺だけノックしなくてはならない？」

「なんでもだよ。あと3日だけ我慢して」

「え………わかったよ。話が変わるけど瞳からメールきたか？」

携帯を開き先ほど瞳からきたメールを見せる

【桜の様子が変(〃―〃；)明日みんな桜の家に集合してくれない？(＜―＞)】

「私にもきたよ。タクちゃん行くよね？」

「おう！じゃ2人とも行くってメールしと……ん？」

メール受信……

受信完了

瞳からだ



【じゃー1時に集合ね）　　）よろしく　　】

「……………」

盗聴でもしてんのか！？  
瞳ならありえる！！

「タクちゃんどうし」

薫が携帯を覗く

「……………」

世の中に何人いるだろう？

友達のメールで恐怖した人が何人いるだろう？

今2人は固まっている  
フリーズ

「拓也く薫ちゃん！！ご飯できたわよ！」

「……………行こうか？」

「そうだね……………」

「瞳…怖いな」

「うん…前は神様の存在否定してたしね」

マジで?!

怖!!

今日夢に瞳が出ないことを願わずにいらなかった

### 第30話

「桜何かあったか？」

「別に……」

確かに変だ

桜は俺に会つと高確率で抱きついてくる（瞳が叩き落とすけどね）

なのに……

俺が家にきたのに全く反応がない！！

奇跡！！

なぐって言ってる場合じゃないかも

桜のテンション異常に低いし……

「元希と喧嘩でもしたの？」

《ピク！》

今薫の質問にピク！ってしたよね？

「別にしてないよ？てゆゝか何でみんなが家にいるの？」

貴女が変になっているから皆で来ました……………言えない

それより……

確かめたいことが……………

「喧嘩？」

「してない」

即答か……

まさかさっきピク！ってしたのって……………

「元希と喧嘩？」

《ピク！》

やはり元希絡みだな

てかみんな気づいたみたいだな……

《せゝの》

アイコンタクトで合図を3人に出す

「……元希！……」

《ビク！！》

《ドスン！》

そんな椅子から落ちるくらい驚いたのか!?

「痛た……」

テンション低いって!

いつもなら

『痛ったー!ー!』

つと!なる

ここまでとなると重傷だな

「元希と何があつたんだ?」

「……ずっと幼稚園から元希と一緒に……隣にすることが普通になってたんだよね……」

……へ?

「それがどうしたんだ?」

「昨日元希が健太に頼んで誰かへのプレゼントを買ってきてもらった」

昨日?

ああゝあれか!

「そのプレゼントって誰へのものだったの？」

桜の表情が暗くなる

「好きな人にだって…」

……

「「マジで!?!」」

「マジだよ。僕もその場で直接聞いたから」

「誰だろうね」

ニヤツくな瞳！

いや……

閻魔大王！

「で？元希に好きな人がいるのとその元気のなさはどう関係があるんだ？」

しばし沈黙

「その……飯にだよ？飯に元希に彼女ができたなら今までみたいに

一緒に学校に行ったり、帰ったりできなくなるじゃない？それに昼食だって食べれなくなるかもしれない……いやもしかすると話すことさえできなくなるかもすれない……そう思ったら」

「寂しくなったの？」

薫の質問に

「うん」

とだけ答える

「そうか……へ？簡潔にまとめると元希に彼女ができたら嫌ってこと？」

桜は

「うーん……」

と言いながら首を傾げている

「そうかもね」

認めた

いやそれって単純に

「元希が好きってコトだろ？」

「はあ？！だ、誰が！」

「桜がでしょ？あんたの話の内容からはそうとしか考えられないけ

ど？」

「……………え？」

瞳の言うとおりだな

あれ？

桜の顔が徐々に赤くなっていく

「えええ！？だって私は拓也が好きはず！！ありえないってそんなの！」

「じゃー元希に彼女ができて文句は言えないね」

薫の発言に桜は下を向いてしまった

「素直になれよ桜」

「それ僕が前に言っただけじゃない？」

ちっ！！

バレたか

「素直…そうだね。自分の気持ち認めないとね…………私元希が好き…………なのかも」

「なのかもじゃなくて好きなんだろ？素直になれって」



「元希が好き」

桜が茹で蛸にみたい真っ赤っかになってる

「拓也ごめんね…貴方とは付き合えなくなっちゃった」

「それは助かる」

本音100%!!

「なにそれ！？酷くない?!！」

よかった…

いつもの桜に戻っている

でも先程から大事なことを忘れてる気が……

「タクちゃん…何か大事なコト忘れてない？」

「え？薫もか?!」

「うん……タクちゃんもなの？」

「おう」

何だっけ？

何を忘れてんだろ？

あ………

思いだした

「桜が元希迎えに行くのって何時だっけ？」

「2時……今何時？」

さてはお前も忘れていたな………

「2時5分………」

「私ちよつと行ってくる!!」

桜がいなくなつて数秒

「どうする？」

「ひとまず応援しましょ？」

「賛成だね」

「私も」

しばらく桜に協力することが決まった

### 第31話

「From瞳

To拓也

24日のクリスマスパーティーという名の文化祭は校門前に4時集合ね（＊ ＊）あと例の2人も呼んであるから（＋＋）元希には他に誰か連れてきて良いことにした……女限定で（――）

12/24

「タクちゃんまだなの？」

「今行く」

部屋のドアの前で待つ薫に返事しながら最終チェック中

携帯…

持った

財布…

持った

プレゼント……

持った！

最終チェック終了

「遅い！」

「……………」

「タクちゃん??」

「急いで着替えてこい。私服にな」

何で制服やねん!!

確かに今から学校のクリスマスパーティー（文化祭）に行くけど担任が

「私服でいいからな」

って言うてただろうが！

「え？あ！そうだった！ちょっと待ってて！」

《ガチャ！ボタン！》

《ガチャ…………》

!!!!!!

「せっかく新しい服買ったのに忘れ…………タクちゃん？どっしたの？私の服に何か付いてるの？」

いやその

「似合ってる…可愛いぞ」

ハ！？

俺は何口走ってんだ？！！

薫の顔が赤い

可愛いな……

俺は何考えてんだああ！

邪念よ消えろー！

「あ、ありがとう……タクちゃん時間が……」  
時間？

《カチ》

携帯を開く

3時50分……

「何とかなる……急ぐぞ」

薫を自転車の後ろに乗せ俺はこぎ始めた

「おっ……す……ゼエゼエ」

キツい……

「何息切れしてんのよ？今からクリスマスパーティーだって言うのに」

「仕方ないよ……タクちゃん家から全力でこいで此処まで来たから」

「お疲れタク。はいお茶」お茶を差し出すケンが神に見える

《ゴクゴク》

「生き返った……元希と桜はどこに？」

「まだ来……あ！来た来た」

「遅くなつてすまん。俺が向かいに行くまでコレが寝てたらしく何も用意してなかった」

「いめ……ん」

『『『元希他に誰も連れてきてない（な）（ね）（）。（）（わね）（』』』

『 』

「他に誰かと此処（地面を指差す）で待ち合わせしたの？」

瞳 ナイスな質問だぜ！

「してない。此処（校舎を指さす）にこれば皆いるだろう？だから他の人とする必要はない」

つてことは……

密会してプレゼント渡す気か！？

「何しているんだ？早く行かないと集合時間に遅れるぞ？」

「わかってるわよ！！」

「何怒ってんだ桜？」

「怒ってない！」

今日はこの2人から目が離せそうにないな



「では今日は楽しんできてください。出店で買った食い物のゴミはちゃんとゴミ箱に捨ててください。では解散」

担任がそう言い終わると教室のあちこちでは

「どこ行く？」

「一緒に行動しない？」

なんて声が飛び交っている

「俺らはどうする？」

5人に質問する

え？

閻魔大王がめっちゃニヤケるやん！

「中庭に行くわよ」

はい？

「……何があるんですか？」

「行けばわかるよ」

ケン何か知っているな！？

「行くわよ？」

そんな風に睨まれたら

「」「」「行かせていただきます」「」「」

イヤとは言えないんだってば（泣）

「ほら！早く」

「」「」「はい！」「」「」

### 第32話（前書き）

遂に読者数が一万人を突破しましたゞ（＾　＾）ノ　　本当にあり  
がとうございます（＾人＾）　　つきましては感想や評価お願い申  
し上げます（＜　ー　＞）

### 第32話

「只今より第8回光輝学園文化祭を開始いたします」

「こんなモノのために来たのか？」

校長の話なんぞ聞きたくもないわ！  
聞くだけ無駄だ

「違うわよ！……ほら始まるわよ」

何が始まるんだ？

「今から光輝学園ベストカップルを決めます！参加者はステージ裏の教室に集まって下さい！！」

うわー！！

コレ見に来たのかよ？！

てかどんな奴等がこんなのに出るんだよ？

「参加者は名前を呼ばれたら返事して下さい。では名前を呼ばさせていただきます」

「始まるまで時間かかりそうだよ？他の所行かない？」

「薫の言うとおりだぜ？他の」

「1年C組…椎名拓也君と堂本薫さん」

今呼ばれたような……  
いやありえん

「椎名拓也君と堂本薫さん？いらっしやいませんか？」

俺らだ（泣）

「はい……います」「

「わかりました」

なぜに名前を呼ばれた？

たしか参加を希望する生徒は先生に名乗り出ないといけなかったを  
じゃ…………

俺ら2人共参加希望してないはず

なのになぜ？

など1人で考えていると

「私たち参加希望してないわよ！！間違いないの！？」

桜が叫びだした

「え？桜と元希なもの？」

「は？まさか薫たちも参加希望してないのに名前呼ばれたの？」

「うん」

「次…同じくC組の真田健太君と瞳さん」

「「はあい」」

「お前等は参加希望してたのか？」

「うん！そうだよ」

「ついでに言うならアンタ達4人も勝手に参加希望にさせてもらったから」

「……………なんだって！？」

「ふざけんな！」

「酷いよ瞳！」

「何で無断で！しかも相手が元希だなんて！」

「喧嘩売ってるのか？桜よ」

「うるさいわね……ほらさっさと行くわよ」

瞳とケンはいきなり歩き始めた

「」「」「行くつてドコに！？」「」「」

「はあ！？決まってるでしょ？ステージ裏の教室」

「いや行かないから！なあ薫」

薫に同意を求めた

「私…出てみたい」

ええーーーーー！？

さっき嫌がってたやん！

どういうこと！？？

「マジで言ってるのか！？」

「うん……ダメ？」

わかったからその上目遣い止めとくれ  
反則だ

「わかった…出てやるよ。桜はどうする？元希とでるのか？」

「俺はかまわん」

「はあ？アンタプレゼント渡す好きな子に見られたらヤバいんじゃないの？」

確かにヤバいのでは？

「かまわん。大丈夫だ」

その根拠は？

いや自信はどこから出てくるのでありますか？

「じゃ～早く行きましょ」

「え～では男子は右端の教室に。女子は左端の教室に入ってください」

「また後でな」

「うん」薫たちと別れて指示のあった教室へ向かった

「はあ～……………」

そんな隣で溜息つくなよ



「元希…どうしたんだ？」

俺らを見てまた溜息をつき話し始めた

「俺が退院した日から桜が変だ。目が合うとすぐに逸らすし、あまり話してもこない。今日も此処まで無言に近い状態のままで来た…  
……でやっと話したと思いきやすぐ喧嘩……俺何かしたか？」

「してないと思う」

「僕もそう思うよ」

俺らその原因知ってますけどね

「だよな」

《ガラガラ》

「ではお入り下さい」

《カシャ》

「はい。いいですよ」

「「「ありがとうございます」」」

記念撮影が終わり教室を出た

「しかし何でタキシードとウェディングドレスなんだ」

オカシいだろ？

しかも参加者全員

「結婚式みたいだね」

「そつだな……」

結婚……か

俺は薫と結婚するのだろうか？

ってまだ結婚はまだ早いな

「タクちゃん…どう？似合ってる？」

うん

「似合ってる」

「ホントに！？ありがとう」

途端に薫は眩しいくらいの笑顔になった

「ホント…可愛いよ」

そう言いながら俺の顔は薫に近づき…

キスをした

顔を離すと薫は

えへへ

と笑いながら俺の腕に自分の腕を絡めてきた

「ステージに行こ！」

ホント薫といると楽しい気分になる

「あいよ」

俺らはステージに向かった

「それでは投票の結果を発表したいと思います…！」

今ステージにいるんだけど……  
ギャラリー多すぎだろ！？

軽く200人はいるぞ！？

「タクちゃん…緊張してきちゃった」

薫の手が震えてる

俺は薫の手を握る

「落ち着け……」

震えが止まった

「うん……タクちゃんの手…やっぱり温かい」

「ほら……結果がでるぞ」

薫がつないでる手をギュッ！と少し力強く握ってきた

「今年はすごい結果になりました！まず第3位は…1年C組元希君、桜さんの2人です！！」

観客がキヤーキヤーと騒ぎ出した

てか………

マジですか！？

「うそ？」

「マジかよ」

本人達も驚いてるしね

「続きまして第2位は…同じくC組の健太君、瞳さんです！」  
ええ！？

これは予想外だ

「あの2人が1位だと思ったのに…」

「俺もそう思ってた」

だから驚いた

今ステージにいる人たちを見ている…………

どう見てもコイツ等が1位にしか思えない

「惜しかったね瞳」

「まあ1位にはなれないってわかってたけどね」

うそ！？

マジで??

「そうだね」

え！？

お前もなのか！

誰なんだ1位は？

誰なんだ！？

「そして栄えある第1位は……………」

1位は！？？

次に発せられた言葉に我が耳を疑った

「同じくC組の拓也君と薫さんです！！拍手！」

は？  
はあ

！？

「タクちゃん……夢かな」

「夢だな」

拍手がパチパチとなり、観客がワーワー騒いでいる中

俺らは信じられずただ突っ立っていた

### 第33話

「キレイだね…」

「ああ」

夜に学校の屋上で星を見るなんて滅多にないだろう

「でもビックした…1位でしかも賞品がコレとソレだなんてな」

今自分たちの着ている衣服を交互に指差す

「これで結婚式で着るドレスが決まったね」

「おいおい……」

「タクちゃん…大好き」

「俺もだよ」

優しいキスをする

「薫…少し目を瞑って」薫は素直に言われたとおりにする

用意したプレゼントをポケットから出した



「目開けていいよ」

目を開けた

と同時にプレゼントを渡す

「メリークリスマス…ほらプレゼント」

『喜んでくれるだろうか』と不安だったせいか少し緊張した

「あけても良い？」

「OK」

箱の中から例の指輪が姿を現した

「可愛い……ありがとう!!」薫の見せた笑顔が俺の不安を吹き飛ばした

この笑顔のためなら何でもできる…そう思えた

「タクちゃん……」

少し顔が赤くなっている

薫の目を見れば言いたいことがわかった

薫の手にある指輪を取り薫の左手の薬指にはめる

「なんでわかったの？」

俺はそんな質問に普通にこう答える

「目を見ればわかる…だって俺は薫の彼氏だぜ？」

前に薫が病院の屋上で言ったことを真似てみた

「そうだね。ありがとう」

そしてまた…キスをする

「薫…さっき『大好き』って俺に言ったよな？」

「うん」

「俺は違う…いや違った」

「え？どついうこと？」

薫の表情から戸惑っているのがわかる

「好きのさらに上かな？……俺は薫を愛している……そして一生愛する」

「それってプロポーズ？」

「かもなっで泣くなよ……………」

「ひつぐ…………だつて…嬉しいんだもん！」

薫の叫び声がコダマする

「わかつたから泣きやめつて」  
《ガチャ》

「タク。パーティー終わ……………」

ナイスタイミングだなケン（泣）

「拓也？はや…なに薫泣かしてんの？ハッ！？まさか薫を襲ったんじゃない……………」

汚物を見るような目で見ないでくれ

てか襲つてねえし

「襲われたの……………」

ええ……………！？

裏切り！？

古風的な言い方だと……………謀反？

「タク…が……………」

「襲つ…た？」

やめて！！

そんな目で見ないで！

「冗談だよ！ホントはプロポーズされたの」

なんでスグに言うかな？

しかも超幸せオーラを出しながら

「マジ?!?!」

「マジだよ」

オーラ全快だな

「プ、プロポーズって言ってもアレだ!!『薫を一生愛する』って  
言っただけだ!!」

恥ず！

「そんなこと言われたの!?それは幸せオーラ全快になるわね」

「タク頑張れ」

恥ずかしい……

生きてきた中で1位、2位のどちらかだな……

「アハハハ！タク顔真っ赤だよ？」

「ホントだ！アハハ！！」

笑うな！！（怒）

「タクちゃん…」

名前を呼ばれた方向に顔を向ける

《チュ》

薫さん……

なんでコイツ等の前でキスをするんですか？！（泣）

「これプロポーズの返事」

「どうも………」

「はぁ…笑い疲れた」

笑いすぎだつてえの！

「もうほらしっかりしてよ！拓也！ほらアンタ等私服！パーティー  
終わってんだから帰るわよ！！」

—————

「元希と桜がいない」

「此処で待つように言ったのに！」

現在玄関前

「探すか……」

「そうね……じゃ健太行くわよ」

「うん あ！見つけたら電話するね」

「よろしく」

「タクちゃん行こ！」

差し出してきた手を握る

「ああ」

探し始めて5秒経過

ケンから電話が

「もしもし？見つかったのか？」

まだ5秒しか経ってないぞ！

《体育館裏に急いできて！》

まさか……修羅場？

まさかね

「どうしたの？」

「体育館裏に行くぞ」

「はい？」

### 第34話

「なんなの？こんなところに連れてきて」

「ゆっくり話がしたくて此处に連れてきた。だってお前最近変だからさ」

確かに変だと思われても仕方がない  
元希にたいする気持ちに気づいてからはドキドキして目は合わせられない、話もできない状態になっているのだから……

「別に普通よ！それより早くプレゼント渡しに行かなくていいの？みんな帰り始めてるわよ」

行つてほしくないけど仕方ないよね……

「はぁ……ほら」

「え？」

元希が何かを投げてきた

《パサ》

キャッチした私は驚いた



「ちょ……これ好きな子に渡すんじゃないの!？」

そう……

投げられたモノは前に病室で見たプレゼント入りの袋だった

「そうだけど?」

「『そうだけど?』じゃない!何で私に投げつけるのよ!！」

「だ・か・ら!好きな子に渡すプレゼントだって言ってるんじゃないかよ」

「だ・か・ら!何で私に渡すのかって言うてるの!！」

意味が分からないってえの!!

ああ〜イライラする!

「いい加減わかれよ……」

「なにをよ!！」

なにをわかれて言うのよ!?

「俺の好きな人っていうのはお前のことだ。だからプレゼント渡したんだよ」

「はい？」

思考停止……………

「ああーもー！だから俺はお前……桜が好きなんだよー！」

「ええー！ー！？」

うそ？！

冗談じゃなくて！？

「嘘でも冗談でもない……まあお前は拓也が好きなんだろうけど……  
プレゼントは受け取」  
私は元希に抱きついた

「私も元希が好き……」

耳元で囁く

「はぁ？お前拓也が好きなんじゃなかったのか？」

「違う…元希が好きなの！！」

「なんで？」

なんでって……

「実は……………」

好きだと気づいた時のことを話している間元希は私をギュッ！と抱きしめていてくれた

「ようは自分相手に嫉妬してたのか？お前バカだな」

「バカってなによ！？だいたいアンタはい」

「幼稚園から」

心読むのやめてくれない？

って

「そんな前から？」

「うん…………桜…今から起こる出来事に驚くなよ」

何のこつちや

「その4人!!でてこい!」

は?

「「「「はい」」」」

この声は!?

まさか……

「見ちゃった」

「いや驚いたわよ」

「まさか元希の好きな人が桜だったとはね」

「おめでとう」

「いつからいたの?」

「「「「初めから」」」」

………ありえない

「桜なにもらったの?見せて!」

「そういえば…………ピアス」

かわいい……

「かわいいじゃない！元希やるわね」

瞳冷やかしすぎ

あ！お礼言わなきゃ！

「元希…ありがとう」

あれ？

元希の顔が赤くなった

「あゝれ？もしかして照れてるのかな？」

ケンもからかいすぎ！

「ケンうるさい」

すごい殺気が……

「皆帰ろつか？」

逃げたな……ケン

「賛成だな。薫」

「はあい」

拓也と薫は仲良く手をつないで歩き始めた  
例のアノ格好のまま

「健太私たちも」

「はいはい」

瞳達も……  
いいなあ……

不意に元希が私の手をつかみ歩き出した

「え？ちよつと元希??」

「羨ましそうに見てたからな」

ドキドキするからいきなりは止めてほしい……

「元希……」

「なんだよ？」

「大好き……」

「俺もだよ」

久しぶりに元希の笑顔を見た

嬉しくて今日は寝れそうにない

### 第35話

《ぴぴぴぴ》

携帯のアラームを止めようとして手を伸ばす……

何か柔らかいモノが……

ここ俺の部屋でベッドのはず………

恐る恐る目を開ける

「ううん」

「……」

叫び声を上げず、下に落ちないように頑張りました

だって母さんに消される（なぜか親父も……）かもしれないからさ（泣）

前回と同じく薫が目の前（布団の中に潜りこんでます）にいる  
言っておくが何もヤらしいことはしてないからな！

まずアラームを止めて……

しばし寝顔を観察



「……………」。

抱きしめたい！

いやダメだ！

……………ぬお——！！

「プッフ……………」

今笑ったよな？

「……………お前120%起きてるだろ？」

「……………」。

寝たフリをするな！！

明らかに俺が悶え苦しむ姿を見て吹き出しただろうが！！

フッフッフ……………」

こちらにも考えがあるのだよ

静かに手を伸ばし

グイ！っと薫を抱き寄せる

「キャー!!」

「ほら起きてんじゃん」

目が合う

「おはよう」

「『おはよう』じゃない…悪戯はよせと言っただろうが」

「それより伝言…じゃなくて置き手紙です」

それよりって……

もう……いいや

紙を受け取り読み始める（片手は薫の背中に手を回している）

「えーと『おはよう拓也」

今日から2週間私たちは薫ちゃんのご両親のもとに遊びに行きます

生活に必要なお金はテーブルの上の蜜柑を入れている籠に入ってる  
ことでしょう

では行ってきます

母より『……………』

「びつくりした？これ朝の2時に見つけてすぐに叔母さん達の部屋に行ったらもう居なかったよ」

なぬ!!？

しかも2週間かよ！

朝から疲れる……

「起きるか……」

薫から手を離そうとするが逆に抱きついてきた

「外……」

外？

外がどうしたんだ？

「くら！今何時だ!？」

携帯に目をやる

2時8分……

「起こしても起きないからアラームを早めたの」

「……………」。

早めたレベルじゃない！

うっ！

強烈に睡魔が……

「寝直すから薫は早く部屋に戻れ」

「いや……このまま一緒に寝る」

そういつて俺の胸あたりに顔を埋める

嬉しいよ？

嬉しいけどさ……

ドキドキして寝れないって!!

「お前何…言っ……てん…だよ」

前言撤回

今なら寝れる

「スウ……。」

寝たのかよ!?  
はやくない??

って俺もそろそろヤバイ……

結局薫と抱き合った状態ままで眠りについた

「眠い……今何時……！！！！薫起きろ！！！」

「もう少し…フニャフニャ……」

「起きろって！」

薫の体を揺らす

「もおゝどうしたの？」

まだ眠いのか体は起こしているのに目は開いていない

「もう8時なんだよ！」

「……何時に空港集合だっけ？」

「8時40分だ……」

薫の目が一瞬にして開かれた

「急いで用意するぞ！」

「はい！」

さて諸君……

なぜ我々が急いでいるのかというと今日が12月31日だからです

遅刻したら瞳が怖い!!

だから慌ててるのさ…

### 第36話（前書き）

更新遅れてすいません>（  
――（  
<

### 第36話

「眠い……」

飛行機は寝て過ごした  
なぜなら疲れたからさ…

「タクは大事な日にかぎって遅刻ギリギリだよね」

笑うな！

笑い事ではすまない出来事なんだよ！！

「朝に家から空港まで全力でチャリを漕ぐ者の気持ち分かるか？  
しかも2人乗りだ……さっき寝たけどまだ疲れとれない」

旅行初日からだるい

「迎えの車が来たわよ」

瞳の指さす方向を見てケン以外の全員が固まる

「はやく乗って」

乗ってって……

お前これ



「リムジン？」

迎えの車がリムジン?!  
あり得ないって!  
それにしても長いな……

運転席から中年の優しき顔をした人が降りてきた

「お久しぶりです瞳お嬢様。」

お嬢様?

瞳が??

この閻魔大王が??

「久しぶりね。草野さん」

「荷物はすでに別の車が運んでおります。どうぞ皆様お乗りください」

「し、失礼いたす」

緊張しすぎだ薰!  
喋り方が変だぞ!

「ほら拓也早く乗って!」

気づけば乗っていないのは俺だけになっていた

「はいはい」

リムジンに乗り2時間で瞳の………瞳の別荘についた

まず一言

デカイ……

「荷物はすでに部屋の中にあります。ではまた明後日に来ます」

草野さんは最後に「よいお年を」と言い去っていった

「とりあえず……はい」

瞳がこちらに何かを差し出す

「鍵？」

「そうよ？ 拓也と薫の部屋の鍵」

今サラリとんでもないこと言わなかった？  
念のため確認を

「誰の部屋の鍵だつて？」

「拓也と薫の部屋の鍵」

沈黙

薫を見ると顔が真っ赤になっていた

「はい。元希と桜」

「え…うん」

桜も顔が赤い

元希も………

じゃなくて

「なんで男と女じゃないんだよ?!」

瞳は

はあ？

とでも言いたそうな顔をする

いやいや俺は間違ったことは言っていないぞ？

「別にヤマシイ気持ちがないなら大丈夫でしょ?」

「いやそついう問題じゃなくて!」

ついつい声が大きくなる

「寒いんだから中にはいるわよ」

無視ですか？

「賛成」

ケンはこのこと知ってたな

寒いのでとにかく俺も中に入ろう

「……………」。

薫と2人で部屋にいるのだが……………  
なんか…ね  
気まずい

沈黙してからすでに10分経過

俺なのか？

先に話さないといけないのは俺なのか？

「あの…」

タイミングわるう

「先に言いな」

「うっん…タクちゃんが先に言って」

そうか……

では言わせてもらおう

「手袋ありがとな。すごく暖かくて助かるよ」

前に俺だけ部屋に入るときノックしなければならぬ時期があった  
そのとき薫は俺へのクリスマスプレゼントの手袋を作っていてくれ  
ていたのだ

「えへへ 気にいってくれて良かった」

「うん気にいった。今まで貰ったプレゼントの中でNo.1だ」  
言い終わると同時に薫が抱きついてきた  
やっぱりコイツが抱きつくのは癖だな

「タクちゃん……その………なんでもない」

声が震えている

「何でもないワケないだろ？」

「今度話すよ」

「3…2…1…」

テレビの司会者とゲストが声を張り出している

そして俺等も声を合わせる

「「「「「HAPPY NEW YEAR」「」「」「」

皆言い終わると隣にいる恋人とキスをする

テレビを見ながら話をしているとすでに時計は午前2時を回っていた

「薫眠いだろ？」

「眠…く…ない」

「はいじゃ俺等もう部屋に戻るわ…おやすみ」

「「「「「おやすみ」「」「」「」

眠りかけの薫を背負い部屋を目指す

ドアを開け中に入りドアを閉め薫をベッドに置きまたドアを開ける

やはり4人がドアの前にいた

「散れ!!」

俺の怒鳴り声により各組部屋に入っていったら

「眠い……」

そう呟きながらもう1つのベッドに寝そべる

「タクちゃん……」

「なんだ？起きてたのか？」

「起きてたよ!……でその……」

「何だ？はつきり言え」

眠いから早く言え

薫は立ち上がり俺のベッドの前にきた

「一緒に寝ちゃだめ？」

「……………はあ?!そんなの」

やめろ!

そんな潤んだ目で俺を見るな!!

わかったから……

「いいぞ」

薫は笑顔になり布団にはいつてくる

「おやすみタクちゃん」

《チュ》

「おやすみ……」

俺絶対顔赤いな

今朝と同じような状態で幸せそうな顔をしながら2人は寝むりにつ  
いた



### 第37話

朝起きると一緒に寝ていたはずの薫は居なくなっていた

「タクちゃんおはよう」

珍しく朝から元気だな……

「おはようっていつの間にか俺の背中に回ったんだ？」

明らかに寝たときの位置が変わっているぞ

「起きたら変わってたよ」

俺の寝相が悪いのか……  
それとも薫の寝相が悪いのか……

間違いなく後者だな

「下に行くか」

立ち上がり背伸びをする

まだ少し眠い……

「うん…タクちゃん」

「なん」

最後まで言い終わる前に薫の唇が俺の唇に重なった

「えへへ。おはようのキスするの夢だったんだよね」

「そそそうか」

眠気はどこかへ飛んでいった

下に降りるとすでに皆起きていた

1人ニヤツいている…

まあ誰と言わなくてもわかると思うが念のために言おう……

閻魔大王……と

「なに朝からニヤツいてんだよ？」

予想はできている

どうせ薫とほにゃほにゃしたのか聞く気だろ？

そんなことは昨日の時点であっているんだよ！

フッ………

さあ聞くがいい！！

すでに反論するための言葉は考えてある

「拓也……」

さあこい！

「これ」

「へ？」

間抜けな声を出してしまった

なんせ瞳は俺の予想を見事に裏切りデジカメを渡してきたからだ

「これがどうしたの？」

薫の言うとおりコレがどうしたんだ？

「電源入れてみて」

「「？」」

言われたとおりに電源を入れる

……………。

「「な？！」」

デジカメの画面から瞳に視線を移すと鍵の束をこちらに見せびらかしていた

「いや」抱き合いながら寝ているとは思わなかったわ。記念に1枚撮らせてもらったから」

「頭きた……」

……。

10分後

立場は逆転していた  
それもそのはず

こんな時のためをと思い瞳の恥ずかしい画像を携帯に納めていたのだから

「すいませんでした……」

「もう2度とするな」

「……はい」

この後は俺と瞳は条約を結び平和的に解決した

「では行くわよ?」

誰もが『ドコに?』と言いたかった

ただ瞳の眼がそう言わさせてくれなかった……

別荘の使用人が運転する車に乗り目的地に向かった

### 第38話

「どこに行くんだ？」

移動中の車内で目的地を知っているであろうケンに質問する

だがケンは首を横に振り苦笑する

「今回は僕も知らないんだ。聞いても教えてくれなかった」

ため息をつきながら外に目を向ける

天気は快晴で雲1つ見あたらなかった

「つきました」

運転手の言葉と同時に車が止まる

そして車から降りた俺ら幼馴染3人が

《ピシッ》

という効果音があうような感じに固まる

到着した場所はある有名な動物園だった

べつに固まったのはその動物園が有名だからではなく動物園ということに問題があった

「おい…何固まっている？」

もう1つの車から降りてきた元希が怪訝そうな顔つきでいつてくる

「いや………ね」

ケンが困ったような笑顔で俺を見てくる

わかりましたよ

俺が言いますよ

「ちょっと！固まってないで早く中に行くわよ？」

説明するから待ってくれ

「実はその……」

「ハツツッキリと言いなさいよ！」

瞳の叫び声に回りの観客はこちらを振り返るが瞳から発せられる威圧感に見て見ぬ振りをしそのばを逃げるように去っていった  
桜と元希は他人のフリをしてる  
薄情な奴らめ……

「はぁ………実はコイツが生き物全般がダメなんだ」

俺の右手に絡まっている薫を指差す

「「「え！？」「」」

これは予想外と言わんばかりの顔をする他3人

「じめん……」

絡めている腕にさらに力を入れて締め付けてくる

痛いから……

とてつもなく痛いからね（泣）

「どうする？」

「桜の言うとおりどうする？」

他人のフリをやめたと思いきや尋問かこの野郎共

でもどうすっかな？

ってコレしかないよな

「4人で行ってきたな。その間俺らは観光でもしてるからさ」

場の空気を和らげようと笑顔で言ってみた

「わかった。じゃ見終わったらで連絡入れるからすぐにここに帰ってきてよ？」

「了解！薫行くぞ」

体を反転させ横断歩道渡り……

観光スタート！

「どこ行くの？」



はい全くその通りですね

周りに何があるかわからないし……困ったね

………ん？

聞こえた

微かにだけど…

《ザ…ザァー》

「「！！！」」

薫も気づいたらしく微笑んでいる

「行くぞ」

「うん！」

薫の手を引っ張って走り出す

隣には大切な人がいる

ただそれだけでも幸せだ

自然と微笑む

それは薫も同じで……

俺は薫と一緒に居るとよくこんなふうに想う

どこまでも走っていけそうな…

飛んでいけそうな……

そんな想いに…

しかし今回その想いは

《ズキン》

「っ…!？」

痛みによって消された

立ち止まり膝を凝視する

ヤバイ……

最近無理してたりしてたからか？

それとも寒さのためか？

膝が痛い…

「タクちゃん？」

異変に気づいたのか不安な顔つきになっている

「大丈夫。少し休めば……………」

治ると言おうとした  
途中で止め指さす

「あ……………」

薫の目が輝き始める

「海だぁ！」

嬉しそうに声を上げ笑う  
明るく優しい愛する人

「行こう」

痛みなど忘れ手をしっかりと繋ぎ歩き出す

### 第39話

「海だねえ……」

「海ですねえ……」

膝の痛みが悪化してはいけないという薫の考えで砂浜に行くためにある階段に座り休憩中

「タクちゃんは覚えてる？ 私たちはまだ小学生で親たちと海へ来たときにのこと」

「覚えてる」

たしか……

「私が溺れたんだよね」

うん

そうそう

「あれは焦ったな。少し離れたところ薫が泳いでると思ったたら波に飲まれて消えたんだから」

薫はこちらをみて苦笑する

すぐに視線を海に戻す

俺も視線を海へ戻した

「あの時ね…私は死ぬんだ…嫌だな…死ぬのは怖いなって思ったんだ。でも水中で暖かい手が私の手を掴んで海面まで引っ張ってくれたんだよね」

今度はニコニコと笑いながらこちらを見てくる

「今もそうだけどあの時私を助けてくれた拓也は特別格好良かったよ」

「サンキュー…」

嬉しいような恥ずかしいような感じだ

……………。

ちよつとまって

「今なんて言った？」

聞き間違えじゃないよな？

「特別格好良かったって……」

顔の温度が急上昇  
じゃなくて！

「その前！俺のことなんて呼んだ？」

薫は顔を赤くして固まる

どうやら聞き間違えではなさそうだ

薫は立ち上がり砂浜に向かって歩き始める

海と階段の半分まで行ったところで体をこちらに向ける

「私は小さい頃から『タクちゃん』って呼んでた！でもね……でもね！私はちゃんと貴方のことを……『拓也』って名前で呼びたいの！！」

顔を真っ赤にしながらも自分の思いを叫んでくる  
そして座っている俺の前まで歩いてきて立ち止まる

「ダメかな？」

俺は横に首を振る

「ダメなんてことない。むしろ俺はそっちの方が嬉しいよ」

薫の頭を手でポンポンと軽くたたく

「ありがとう」

幸せオーラ全開で微笑んでくる

あの後2人で海を眺めながら過去を振り返った

幼馴染み3人で毎日一緒に学校に行ってたこと  
帰っていたこと  
遊んだこと

小学校卒業と共に薫の引っ越しに3人が涙を流しながら別れた

中学校で膝に怪我をし絶望する

そして薫との再会

喧嘩したけど最後は仲直り

薫は俺の心の傷を治しまた再会したときの約束をしアメリカに帰る

そして去年薫は俺のクラスに転入し1日目に事件を起こす

トドメには一緒に住むことになっていた

その後も色々あった

ケンたちが俺の背中を押してくれたおかげで恋人同士になった

クリスマスパーティーではベストカップル校内第1位に選ばれた

どんなことを思い出しても薫はいつも俺の傍にいたような気がする

《ピリリリ》

携帯が鳴る

画面を見ると瞳からだった

「もしもし？」

《今から外に出るから戻ってきて》

「わかった」

電話を切りポケットにしまう

薫は俺に手を差し出してくる

「拓也みんなのところに帰ろう！」

「ああ」

差し出された手を握りもとの場所へ戻ることにした

歩くこと数分たった時に冷たい白いものが空から降ってきた

「雪だ」

そう言って立ち止まり微笑む薫はまるで天使だった  
左手にはプレゼントした指輪がつけてあった

「薫」

「なに？」

「愛してる」

「私もだよ」



そつと唇を重ねる

再び歩きだし待ち合わせ場所の前にある横断歩道まできたとき俺は薫の手が赤くなっていたことに気づいた

だから後ろにある自動販売機でホットコーヒーをカイロ代わりに買うことにした

ちょうど信号は青だった

「薫先に行つてろ。コーヒー買ってくるから」

「うんわかった」

握っていた手を離し薫は周りにいる大勢の人たちと向こう側へ歩き出した

「さつさと買うべ」

後ろを向き自動販売機にお金を入れコーヒーを2つ買う  
再び振り返ると信号は赤になっていた

向こうでは薫はみんなと合流しこちらに手を振っている  
軽く手を振り返し信号が青になるのを待つ

チラリと横を見ると少し離れたところにバスケットボールをもった  
小学3年生くらいの男の子が母親の後ろを歩いていた  
男の子の隣には同じくらいの年の女の子がいた  
昔の自分たちに重なりつい微笑んでしまった

不意に男の子がボールを落とし拾おうと道路に飛び出した  
横からはスピードのでている車が迫っている  
持っていた缶を投げ出して男の子めがけ走り出した

「危ない!!」

後ろで女の子が叫ぶ

そして……

## 第40話（前書き）

今日からまた更新を再開していきます（\*  
―\*  
）

## 第40話

《ガシャン！》

今見ている光景が現実でないように思えた  
でもこれは現実だ

前に見た悪夢が現実となった

私の目の前で大切な人が車に…

「拓也！」

走って倒れている拓也の傍に行き名前を呼ぶ

「タク！つ元希救急車呼んで！！瞳と桜はそこにいて！」

隣にきたケンちゃんが指示をだす

「わわかった！」

いつもは冷静沈着の元希が慌てている

「親父！？僕だけど拓也が車にひかれて！脈？！まだある！！それで」

ケンちゃんはおじさんに電話をしている

「……か…おる」

「拓也！聞こえる！？」

手を握ると微かに握り返してきた

「おとこのこは？」

横に目をやると男の子には怪我はなく立ち上がって母親に抱きつかれている

隣には泣いている女の子がいた

「無事だよ」

私は堪えきれず涙を流してしまった

「よかった」

力なく微笑むと握っていた手から力が抜けた

「たくや？」

「……………」

返事がない

うそ……

いやだ……

「嫌ああ！拓也？！目を開けてよ！拓也！！」

「タクっ……脈はまだある……っ！！」

手首に手を当てていたケンちゃんの目が大きく開かれる

手が震えている

「頭を…打っている」

「……………」

目の前には『手術中』の文字が光っている

誰もが口を開かずにただ静寂が私達を支配していた

拓也が運ばれてからすでもう4時間が経った

ケンちゃんの情報のおかげで早く措置ができると言っていたのに…

もう4時間……………

「……………!!」「……………」

ランプが消えみんなが立ち上がる  
扉が開き医者が1人現れた

「拓也は?!」

私は叫ばずにいらなかった  
大切な人がこの世からいなくなるなんて考えただけで身が引き裂かれるような想いになる

「大丈夫ですよ。命に対する心配はありません」

そう言った後に医者から微笑みが消え深刻そうな顔つきになった

「ただ頭を打っているためいつ目を覚ますかわかりません。最悪の場合一生目が開かれることがないことも……」

私は目の前が真っ暗になった

目を開くと白い天井が見えた  
もしかしてさっきのはすべて夢？

「薫？」

「瞳……桜……」

横に目をやると目が真っ赤になっている瞳と桜がいた  
その光景を見てやはり事故は現実起きていたんだとわかった

「拓也は？」

「薫の隣のベッドで眠ってるわ」

逆方向に体を向けると眠っている拓也がいた

「拓也……」

ベッドから立ち上がり横のイスに腰を下ろし手を握る  
手からはいつものように温もりが感じられた

「瞳……」

「……うん」

2人は病室を出て行くと代わりにケンちゃんが入ってきた

「さっき叔父さんたちに電話してきたよ。明日には帰ってこれるって」

「そう……」

頭を撫でる

「拓也……」

名前を呼んでも反応がない

拓也……

貴方はどうしたら目を覚ますの？

笑ってくれるの？

手を握ってくれるの？

キスしてくれるの？



また涙が流れた

## 第41話

拓也はその日目を覚ますことはなかった  
翌日の昼前に叔父さん達が帰国した  
ついでに私の両親もやってきた

「拓也……」

何度名前を呼んだらろう？

「薫。これ買ってきたから食べなよ」

ケンちゃんはコンビニの袋をベッドの横の机に置く  
でも食欲はない

「じゃ僕は戻るよ……」

そう言ったケンちゃんの目を見て直ぐに私は眠れなかったんだとい  
うことが分かった  
ケンちゃんが出て行ったら5分後に叔父さん達が入ってきた

「拓也……」

おばさんからはいつもの明るさが消えていた

「早く目を覚ましてほしいな……」

叔父さんからも暗い感じがする  
私は1日中手を握り名前を呼んでいた

まるで機械のように……

「ここは？」

気がつくとも周りには何もなく、真っ暗な闇だった

「あれ？おかしいな……」

記憶をリピートしてみよう

確か……

男の子が飛び出して……

俺が庇って

………車にひかれた？

ってことは………

俺は死んだ？

いやいやいや………

などと1人考えていると何やら宙に浮かぶ丸い光が目にとまった

何だこれ？

電球………じゃないな

ゆっくりと手を伸ばす

光に触れた途端に記憶が舞い戻る

『私も好き』

想いを告げてくる薫

『タクちゃん約束……』

涙目で俺と約束を交わしている薫

『ありがとう』

嬉しげに微笑む薫

『拓也つて呼びたいの!』

俺の名前で呼ぶ薫

薫………

会いたい……

薫に無性に会いたくなつた  
会いたくてたまらない………

そう思つたときだつた……

左手に温もりを感じる………

何もないのに……  
でもこの温もりは……

「薫……」

なんだろ……

頭に何かが当たっている

いや違う

撫でられている……

まさか……

うつんきつとそう

この優しい撫でかたはをするのはこの世に1人だけ……

目をゆっくりと開くと視界に月を眺める愛しい人がいた

「たく や？」

声に気づき視線を私に向けてきた  
綺麗な澄んだ瞳が私をとらえた

「ごめんな 薫」

微笑むその顔が……

優しい声が……

握り返す温もりのあるこの手が……  
すべて愛しかった

「私……ね……寂し……か……ったん……だよ」

「ごめん」

優しく私を抱きしめる  
でも私の目からは次々と涙があふれ流れる

「怖…か…つたんだ…よ？もし…拓也が」

「俺は死なない。前に約束したから」

ギュツと強く抱きしめてくる

「うわああああん！」

私の泣き声は廊下まで響いた

「泣くなよ…」

私は拓也の腕の中で泣き続けた  
悲しいのか嬉しいのか分からないが泣き続けた

## 第42話

次の日の朝はこの病室だけ大騒ぎだった

瞳と桜は俺の動く姿を確認すると泣き出し、ケンと元希は無事を喜び騒いでいた

みんなが俺のことをここまでも大切に思ってくれていることに嬉しく思い少し涙が流れた

「拓也！」

入口から高速スピードで移動し俺に抱きついた母さんに一言申したいその行動は一般的に抱きしめるじゃなくてタツクルと呼ばれているのだと

「ゲホゴホ…親父は？」

薫の話によると親父もいるはずだが……

「あゝ……ちょっとね」

母さんが言葉を濁したということとは……

親父の身に何かあったのだろう

例えば……

俺が目覚めたことに喜び勢いで親父をボコボコに……あり得ないこともない

「薫ちゃんのご両親と話してるのよ」

うわゝ……

俺の推理とは全然違うパターンできたか

なんか敗北感が……

「あゝじゃ僕たち4人は帰りますね」

「え？ちよつと健太？？」

瞳はケンにズルズルと引き面れていった

「また明日来るから」

「安静にな」

2人は苦笑しながらケン達を追って帰っていった

「じゃゝ母さんも帰るわね。後で父さんと薫ちゃんと薫ちゃんの」  
両親が来るから」

なぜか悪戯な笑みを浮かべながら母さんが病室から去っていった  
その間ぞつとして鳥肌が立った

しばらく病室の窓から外を眺めていた  
雪が降り寒そうだった

《コンコン》

ノックの音が聞こえた

「開いてる」



たぶん親父達だろう

だがまたしても俺の推理ははずれた  
病室に入ってきたのは男の子だった  
すぐに母親と女の子が入ってきた

……………だれ？

「すみませんでした！」

母親は頭が地面にめり込みそうな勢いで頭を下げてきた

てか何か謝れるようなことは……………ある  
男の子をよく見ると俺が助けた子だった

「頭を上げてください」  
なるべく優しく、穏やかな声を出す

「……………はい」

少し間はあるが顔を上げてくれた  
と同時に男の子が俺の近くまで歩み寄ってきた

「ありがとうございます」

ニツと笑い御辞儀をする  
すると女の子が男の子の隣まできて

「ありがとうございます」

と同じく礼を述べ御辞儀する

「どういたしまして」

笑顔でこたえる

「君たち名前は？」

「火野螢<sup>ひの ほたる</sup>です。小学2年生です。趣味はバスケです」

丁寧に学年と趣味まで公表してくれました  
趣味がバスケとは…  
良い趣味してますね（笑）

「下田奈緒<sup>しもた なお</sup>といひます。学年は螢と一緒にです。趣味は読書です」

アンタ本当に小学生？  
なんか大人だね……

「火野和子主婦<sup>ひの かずこ</sup>です。年齢は言いたくありません。趣味は息子と同じバスケよ」

誰もアンタには聞いてねえよ  
しかも趣味一緒かよ！  
だいたい年秘密って……

《コンコン》

再びノックの音がした  
今度は間違いなく親父達だろう

「どうぞ」

《ガラガラ》

久しぶりに親父登場  
続いて薫とその両親が入ってきた  
薫は俺と目が合うなりニコツと笑ってきたので笑いがえした

ん？

よく見ると親父の頬が一部色が変わ

「拓也……」

親父の目には多少涙が……  
だが親父よ……

感動の御対面に悪いが言わせてくれ

「右頬が変色しているのはなぜだ？」

涙が消え去り体が震えだした

「母……聞くな」

どうやら俺の推理は当たっていたようだ  
明らかに今『母さん』と言おうとしたからな

「私達は今日は帰ります。また明日お伺いします」

「お兄ちゃんバイバイ！」

元気よく声を出し奈緒ちゃんにひっぱられ出て行った

「タク君大丈夫か？」

相変わらず人のことを心配しているように見えない

「大丈夫ですよ茂さんつよし」

「はいこれ。アメリカのお土産」

「早紀さんあけみありがとうございます」

お土産を受け取り、ひとまず机の上に置く

「母さんが言ってたけど話って何？」

俺の発言に薫は俯く

「実は私達が日本に帰ってきたのはあなたに話があるからなのよ」

話ね……

たぶん俺と薫が付き合っていることについてだろう

「君と薫が付き合っていることについては君の御両親から聞いている。ただ……」

「ただ？」

何が言いたいんだ？

ハッ！

まさか別れると？！

「ただ…私達の予定に変更があつてアメリカに10年ちかく居なくなつたんだ。それで薫を引き取りに来たんだよ」

## 第43話

「え？」

これはドッキリですか？

いや違う……

親父の顔が真剣そのものだ  
それに薫の手が震えている

薫の手を握る

震えは止まったが顔を上げない

「何の冗談ですか？」

冗談ではないことは分かっている  
だけど認めたくない

薫が遠くに行ってしまうなどイヤだから……

「冗談ではない。いたって真剣な話だ」

再び震えだした薫を引っ張り、抱きしめる

「今までのように俺の家に居ることはできないんですか？」

「……3日後には薫を連れて帰るつもりだ。もしどうしても嫌だと  
言うのなら後でこれを読みなさい」

茂さんから封筒を受け取る

いったいこの中の手紙には何が…

「私達はもう帰るわ。あとはお父様と話をなさってください。タク君も聞きたいことがあるでしょう?」

ふふふと微笑みながら薫を連れ帰っていった  
薫は出て行く間際に『また明日』と言ってくれた  
暫くドアを見ていたが親父に視線をうつす

「親父には聞きたいことがある」

二人とも目は真剣だ  
たぶん何を聞いても答えてくれるはず

「何が聞きたい?」

微笑んではいるが硬い表情だ

「3つある。まずいつ退院できる?」

「明日だ」

即答だった  
てか意外と退院するの早いな…

「次は……」

目を深く瞑り、軽く深呼吸し目を開く

「右足はどうなっている?」

親父は固まった

室内の空気も凍りついた

先に口を開いたのはどちらでもなく

「膝の筋肉組織が地面にたたきつけられた衝撃で破壊された」

ケンだった

ケンの登場に2人とも意外にも驚かなかった

なんとなくいるような気がしたから

「詳しく説明すると難しいから簡潔に話すよ？」

「ああ」

たぶん俺の考えているとおりなら…

「タクは……もう走れないし、飛べない。ようはバスケットどころかスポーツはできない」

ケンの言い終わると同時に俯いた

「やっぱりな」

俺の言葉に2人は驚愕の表情になった

「目を覚ました時からわかってたよ。動かそうにも右足だけが動かねえんだからさ。はあ………だいたいそこで立ち聞きしてて気づかれないとでも思っているのか？ 薫」

「……………」

さらに驚愕の表情になった



「バレてた？」

開かれっぱなしのドアから薫が出てきた

顔はさつきよりも少し青白かった

たぶん今の話は初めて聞いたのだろう

「当たり前だ。なんせ俺はお前の彼氏だからな。なぐんてね」  
場の空気を和らげるため少しオドケてみる

「ほら他の4人も出てこい」

「まいったな…」

流石にケン苦笑した

バレない自信があったのだろう

「はあい」

やはり居た

瞳

元希

桜

母さん

の4人が…

## 第44話

「母さんは知ってただろうが……みんな知ってたのか？」

やや間があつて全員が首を縦に動かす

「そうか…薫は？」

「わ、私は……さつき」

そう言つてすぐに俯いた

手は自分の服を力強く握り締めている

たぶん泣くのを堪えているのだろう

「親父…最後の質問だ。この手紙の内容を知っているか？」

「知っているよ」

親父の目は真つ直ぐ俺の目を見ている

「いずれ薫と相談しないといけないこと？」

「そうだ」

ケンの方に視線を向ける

眼にはいつものような優しい、落ち着ける色をしていた

「リハビリの必要は？」

「ある。と言うよりしないと歩けなくなるよ」

「その期間は？」

「半年から1年」

次に瞳に視線を向ける

「あと3日間別荘使えるか？」

「ええ使えるわ。でも3日後から学校よ？」

「わかってる」

もちろん嘘です

知ったかです

ホントは知りませんでした

てゆうか学校始まるの早くねえ？

「俺と薰だけこっちに残るよ。次の日に地元に戻るよ」

「わかったわ。くれぐれも変なことしないでよね？」

「するか！」

何を言うか！！

「瞳！からかつちゃダメだよ」

「桜と同意見だ」

カップルらしくなった桜と元希は俺の援護してくれた

普段と変わらない態度の4人

はつきり言って嬉しかった

変に気を使わせたり、使ったりされては嫌だったから

「タクは地元に戻ったらうちの親父が待ってるから頑張りなよ」

ケン…

「薫と早くデートできるように頑張りな」

瞳…

「拓也には薫が居るから大丈夫だよ」

桜も…

「頑張れ」

元希も…

みんな心から応援してくれているのが分かった  
なぜかって？

簡単さ……

こいつ等は俺にとって大切な人達だから

「ありがとう。俺頑張ってみるよ」

「私達も応援しているわよ」

親父と母さんも…

「ありがとう。全員に悪いんだけどちょっと部屋から出てってくれないか？薫と話があるから」

薫はまださつきと同じ態勢だった

「わかった。みんな1度部屋から出よう」

「いえ僕達はホントに今日はもう帰ります」

じゃあまた明日

と言ってみんな出て行った

ついでに言つと親父達も今日は帰るらしい

「薫…こつちにおいで」

手招きをしながら呼ぶとベッドに腰を下ろした俺に背を向けて

「…泣くな」

後ろから抱きしめる

薫は俺の手を掴む

「だって…も…う」

わかっている

次に何というか分かっている

「いいんだ。もう…」

「じゃあ…な…んで…泣いて…るの？」

「え？」

薫に言われて気づいた

俺の目からは涙が流れていた

大丈夫だと自分の心に何度も言い続けてきた

そして割り切れたつもりだった

でもダメだった

体は正直だ

薫をさつきより力強く抱きしめる

2人とも声を押し殺して泣いた

泣きやんでから数分たった  
そろそろ本題にはいることにした

「薫は手紙の内容は？」

「知らない……」

「わかった。一緒に読もう」

真剣な眼差しを俺に向けながら頷く  
封筒から紙を取り出し読み始める

……

「「はあああああ！？」」

手紙の内容は俺達を驚かすものだった

## 第45話

「じゃあ明後日に学校で会いましょう」

各自別々に一時期の別れの言葉を述べた

「行っちゃったね……」

「行っちゃったな……」

「私昼食作ってくるね」

特に焦っている様子もなく薫は部屋を出ていった

俺はと言うとベッドの上にいた

横にある机の上から手紙を取り出し読み始める  
そしてまた

「はあ……」

溜息をつくのであった

《タク君と私たちの大切な娘へ

君達に3日間の猶予を与えよう。もし下に書いてある約束を必ず守れるのなら薫は日本に残ってもいいぞ。》

ここまで読み机の上に戻す

「どうしよう?」



1人嘆くのであった

――――

簡単にチャーハンを作って部屋に持ってきたんだけど…

「寝てる…」

寝息をたてながら拓也は寝ていた

仕方ないので机の上に置く

かわりに手紙を手に取り読み始める

《タク君と私たちの大切な娘へ

君達に3日間の猶予を与えよう。もし下に書いてある約束を必ず守れるのなら薫は日本に残ってもいいぞ。約束と言っても簡単なことだ。2人には、婚約者、になってもらおうと言っただけのことだ。親としては娘に幸せになってもらいたいからね。ハハハ！……3日後の4時には返事を聞かせてもらうつもりだ。》

「はあ……」

つい溜息をつく

だってねえ……

いきなり婚約って……

「どうしよう」

拓也が起きるまで考えふけっていた

――  
「薫……」

「なに？」

真剣な眼差しでお互いを見合う

そろそろ答えを出さなくてはいけない  
だから答えよう

「うまい！」

そうチャーハンの味について

「よかった　ちなみに醤油ベースのたれで作ったんだよ」

ニコニコと微笑む

《ピンポン》

チャイムの音がした

「誰だろう？」

チラリと時計に目をやる

午後1時ジャスト！

やったね

じゃなくて……

ケン達の乗った飛行機は飛び立っているから違う

「私見てくるね」

「ああ。気をつけろよ」

「はあい」

少し早歩きで薫は玄関に向かった

《ドタドタ…》

え？なんだ？

もの凄い階段を上る音がするんですけど？  
《バン！》

もの凄いスピードでドアが開かれた

「お兄ちゃん今日は！」

「螢?!」

「こんにちは」

「奈緒?!」

なぜこの2人が？

ああ……

また階段を駆け上がる音が……

「コラア！2人とも階段を上るときは歩かないと危ないでしょ！」

和子さん……

音からしてアンタも走ってただろ？  
まったく説得力ないよ？

「あの〜何でここに？」

「たたた拓也君?!」

えええ?!

今気づいたんですか?!

可哀想だがツツコミどころ満載な人だな……

「はい。で!何でここに？」

「実はこの子達がアナタに会いたがって…迷惑よね」

「そんなことないですよ。俺子供好きなんで」

《トントントン》

今度はゆっくりと歩いて階段を上る音が聞こえた

「螢君と奈緒ちゃん。ジュース持ってきたよ」

オボンにコップとこーらをのせた薫が現れた（昨日この子達+  
ことは話していた）

薫の態度からするとかなりの子供好きなんだと思った

「和子さんは下でおばさん達が珈琲を入れて待ってますよ」

途端にハツとした顔になる  
てゆうか親父達も来たのかよ！

「じゃーこの子達には俺達の相手になってもらいますね」

遠回しに『2人はここで預かります』と言ったつもりんだけど通じたかな？

「拓也君……ありがとう。螢と奈緒はここでおとなしくしてなさい」

「「はあい」」

元気な返事をする  
かわいいな……

とりあえず4人でコーラを飲む

「君達はここから家近いの？」

「うん！奈緒とはお隣さんなんだよ！」

元希いっぱいに答えてくれる螢

「へえ…なんか昔の私達みたいだね」

膝の上に乗せている奈緒の頭を撫でながら薫はこちらに微笑みながら言う

確かに似ている

「生まれた時からお隣さんなんだよ！」

訂正

全く同じです

「へ、へえ」

さすがに驚いているな

「螢君は奈緒ちゃんが好きなの？」

「おいおい！」

何でそんなこと聞くよ？！

まだ小学生だぞ！

しかも低学年だ

「うん！僕達結婚するんだ！」

『僕たち結婚しよう！』

なんだ？？

今のは？

螢の言ったことに忘れていた記憶が脳裏をよぎった

「奈緒ちゃんはいいのかな？」

「うん 結婚する」

『うん 結婚したい』

次に昔に薫が言った言葉よぎる……

だが完全には思い出せない

## 第46話

「螢に奈緒。帰るわよ」

ドアが開くと同時にそう呼ぶ声がした

「すいませーん。螢と2人でちょっと話をさせてください。薫」

名前を呼ぶと薫はニコリと微笑み奈緒を連れて部屋から出て行った

「さて…と。螢、あそこにある鞆持ってきて」

「うん」

立ち上がり指示したとおりに動いてくれた

《ガサガサ》

鞆の中からある物を探す

「あつたあつた」

それは俺の大事なもの  
だけど2度と使うことのないものだ

「螢これやるよ」

それを差し出す

螢はそつと手に取る



「リストバンド？」

「そうだ」

そう…

螢に渡したのは赤のリストバンドだ

「実はお兄ちゃんもバスケの選手だったんだ。そしてこれはお兄ちゃんにバスケを教えてくれた人からもらった大切なものなんだ」

「大切なもの？」

螢の言いたいことはわかる

貰っていいのか疑問に思っているんだろう

「うん大切なもの。だけど螢にあげたいんだ」

「なんで？」

「螢がバスケを好きだから」

「え？」

そんな理由？とでも言いたそうだった  
でもこれがホントの理由だから仕方がない

「だからそれを着けて上手くなれよ」

笑った

心から笑った

俺は事故でバスケットはできなくなった

でもだからって螢を恨んでなどいない

俺の足が使えなくなっただけでまだ未来あるこの子が助かって良かったのだと今は心からそう思う

「わかったよ。これ貰うね」

螢は腕につけこちらに見せてきた

ニツと子供独特の笑いかたをしながら

「ほら、お母さんが待ってるから行きな」

「うん！またねお兄ちゃん！！」

『サヨナラ』ではなく『またね』と言って螢は出て行った

「あれ上げたのか？」

声をかけてきたのは親父だった

無音でここまで来るとは…なかなかやるな

「まあね。螢もバスケット好きだって言ってたから」

「そうか……話が変わるが答えは出たか？」

やっぱりその話が……

「そのために今から薫に聞きたいことがあるんだ」

「なにをだ？」

「親父に言っただけで何にもならん」

事実だ

だから言うのさ  
ストレートに

「教えてよう」

精神年齢小学生並だな

「い・や・だ！」

「そんなこと言わずに」

クドい

ああ、苛々してきた

《ドカ！》

「ほげら！」

奇声を発し親父は死んだ  
いや、気絶した

もちろん親父をやったのは……

「薫ちゃんと話がしたいんでしょ？父さん連れてくわね」

笑顔の母さんだった

だがナイスな行動だよ

引きずられる親父に向かって手を合わせる  
永遠に眠りたまえ……

「南無南無……」

「拓也？何してるの？」

いつの間にか目の前には薫がいた  
ひいてる感じの表情で…

「ああ…なんて言うか…そのお……念仏？」

薫の表情を記号に置き換えると『？』が適切だ

「あのさあ…聞きたいことがあるんだけど……」

「なに？」

「うーん…昔さあ…俺と結婚の約束したか？」

薫の目が大きく開かれる

何か言いたいのかわからないが口がパクパクと動いている

「……したんだろ？」

さらに追い打ちをかける

「うん……」

認めたか…

「いつ？」

「覚えてないの？」

「約束したのは辛うじて覚えてるんだけど……」

いつしたかは全く覚えていない  
場所も定かではない

「…思い出したい？」

「ああ」

「仕方ないなあ…話して上げるよ」

こうして昔話が始まった

## 第47話（前書き）

なんだこれ（笑）

## 第47話

「薰！こっちこっち！」

後ろから大声で私を呼ぶ声がしたので振り返る  
そこには私が好きな人が笑顔で手招きしていた

「写真撮るよ！早くきなよ！！」

隣にはずっと一緒に過ごしてきた友人もいる

「今行く！」

駆け足で2人のもとへ行く

「母さん。みんな揃ったよ」

「はいはい　じゃゝ撮るわよ」

さつきまで卒業するのが悲しくて泣いていたのが嘘のような眩しい  
笑顔を3人がカメラに向けられる

《カシャ》

「はい。次は2人ずつ」

タクちゃんのお母さんの指示により2人ずつで写真に写る  
最初にタクちゃんとケンちゃん、次に私とケンちゃん  
最後に私とタクちゃん

「笑って笑って」

タクちゃんはいきなり手を私の肩にまわした

《カシヤ》

「薫ちゃんの薫真っ赤になってるわ」

だって好きな人にいきなり肩に手を回されたら……ねえ？

「薫」

聞き慣れた声がした

「ママ……」

「わかってるわね？」

「うん……」

一気に私のテンションはがた落ちした

ママは最後に「6時までよ？」とだけ言い残して先に帰って行った

「薫？」

「え？あ…なに？」

タクちゃんはジッと私の顔を見てきた



「元気ないな……」

「だってあと5時間したら遠いところに引越すんだよ？嫌だよ……」

「僕も嫌だな……」

（この頃拓也は自分のこと『俺』ではなく『僕』と呼んでいたのです！ By 薫）

「タク！薫！公園に行くよ！」

遠くからケンちゃんが私たちを呼ぶ

「行つてらっしゃい」

おばさんに見送られながら私たちはいつも遊んでいる公園を目指した公園に着くと昨日用意していたシャベルを使って桜の木の前に穴を掘り始めた

掘り始めて2分過ぎた頃私達はある過ちに気づく

「いったん帰らないと手紙ないじゃん！」

タクちゃんの叫び声が公園に響きわたった

ああ……小さな子がタクちゃんを変な物を見るような目でしている

「私も……ない」

「入れ物もないしね」

なぜかケンちゃんは余裕だった

「僕はまだ掘ってるから2人とも一回家に帰ってまた来なよ。2人が帰って来たら僕も手紙取りに帰るから」

「わかった。よし走るぞ！」

「うん！」

後ろから

「入れ物忘れないでね！」と聞こえた

公園から家までは走れば5分くらいで着く  
そして私達は5分でついたのだが……

「ぜえぜえ…1分ゲホ！以内に…ね」

「おう…」

私は息が上がりまくって苦しかった  
タクちゃんはバスケをしているから分からないがあまり息が上がっていなかった

1分後

見事合流し、また5分かけて走るのであつた

「ぜえぜえ…げほげほ！」

喋れない域まで達してしまいました

「おいおい…大丈夫か？」

私はただただ首を縦に振るしか答えるすべがなかった

「じゃ～僕は行くね」

走ってケンちゃんは公園を出て行った

「じゃ～穴掘り……マジ？」

タクちゃんは驚きのあまり顔がヒキツっている  
何に驚いているか分からなかったがすぐに分かった

「2メートルは軽くいつてるね」

ケンちゃんは一人で穴を掘り終えていたのだ

## 第48話

「ちょっと待った!!」

俺の叫び声により薫による昔話が中断される

「どうしたの？」

「全て思い出したんだよ」

薫は嬉しさと恥ずかしさが混じり合った表情をしている

「ホントに?!」

「ホントだ」

「よかったな薫」

「「!!」」

「……………なぜに？」

「パパ?!」

「そうだが？何か問題でも？」  
「大有りだ！」

「鍵してありましたよね？」

どうやって侵入してきたんだよ！

「ふ…私に不可能はないのだよ」

言ってる意味が分かりませんから  
だいたいいつから居た？

「だいたい何で茂さんが喜んでるんですか？」

「その話は薫がずっと私にしていってね…実を言つと3日間の猶予は  
タク君に薫との約束を思い出してもらつたためのものだったんだよ」

今サラリとんでもないこと言つたよね？  
自覚してんのか？

「何で俺が約束を忘れてること知ってるんですか？」

まさか家に盗聴してはいないだろうな？  
いや……この親バカならありえる

「タク君が事故に遭うだいぶ前に電話で薫から言われたんだよ『タ  
クちゃん昔した約束忘れてるみたいなの』ってね。だいたい君の御  
両親が私のところに来たのは私が約束の話と薫の話をして君に約束  
を思い出すようしむけるために許可をもらつたためだったんだよ」

次々と告げられる真実にただ黙ることしかできずにいた

「あと婚約の許可もね」

婚約の話がついでになっていることにはツッコまないでおう

「君達にあと2日猶予を与えよう。だから……」

さっきまでとは打って変わって優しい笑顔をこちらに向けてくる

「帰ってあの公園に行ってきたさい。そして君達で自分達の答えを出しなさい。ただ公園で答えを出すのではなく真田病院で答えを出したなさい」

最後には普通の顔に戻っていた  
てゆうかなぜ真田病院でなわけですか？

「わかりました。明日帰ってすぐに」 「明日？なにを言ってるんだね君は。今からに決まってるだろう！」

アンタこそ何言ってるんだよ！！

チケットがないから帰れ……なんですかその長細い形の紙は

「ここにチケットがある」

なぜ6枚？

「タク君の御両親と早紀はすでに下で待っている。2人とも急ぎなさい」

「だから叔父さんたちスーツケース持ってたんだ……」

「もっと早く疑問に思えよ！」

とツツコミを入れつつバックをもつ

「私が持とう」

やはりこういう優しいところは昔と変わっていなかった  
だから昔みたいに……

「ありがとうございます」

「君のその笑顔久しぶりにみたよ」

笑えた

## 第49話

《ザッザッ》

土を掘る音だけが公園に響いていた  
目の前ではケンがひたすら穴を掘っていた

「でもビックリしたよ。いきなり帰ってきたかと思えば穴を掘って  
ほしいなんて」

作業をしながら顔をこちらに向けてきた

「仕方ないだろ？俺はこんな状態なんだし」

そう……

俺は車椅子に乗っていた

単純に立って歩くことができないからだ

「まあ…その状態が嘘のように完璧に治る方法があるけどね」  
そう言ったケンはどこか遠くを見るような悲しい眼をしていた

「それってど」「ジュース買ってきたよ」

ケンへの問いかけは薫の元気な声によってかき消された  
もう聞く気も失せたので聞かなかった

《ガッ!》

シャベルが何か堅いものに当たった



ケンは器用に当たったものの周りだけを掘り、取り出した

「これって……」

そういえばケンにこのカンカンのこと言ってなかったな

「はい」

「え？」

「タクが開けなよ。これの発案者なんだから」

ニコニコと微笑みながらカンカンを手渡してくる  
そつと手に取り、開け…  
開け……

………

開かない

「ふんがあー!!」

指に思いっきり力を入れ蓋を引っ張る

《ガパン!》

開いた!

「御対面だね」

薫は無理して笑顔を作っていた

そのことはケンも気づいたみたいだがあえて言わなかったようだった

3人とも昔自分が大切にしていた物と将来の夢を書いた紙を手に取り読み始める

「僕は医者になるって書いてあったよ」

アハハと笑うケンからも無理していると感じられた

薫はこのあと答えを出さないといけないから無理して笑うのはわかる  
だがケンが無理することが理解できず腑に落ちなかった  
それにさっきの言葉も気になった

「本当は知ってるんだ…全て。茂さんと親父から話を聞いてるんだ。  
婚約のことも…これから病院に行って起こることも……………」

「これから起こること?」

薫が呟く

なんだよ……

これから起きることって

「病院へ行こう。そうすればわかることだから」

ケンに押されながら公園をあとにした  
気がつけば病院についていた

「タク…薫……………」

「何？」

「僕はタクと薫がこれから出す答えには何も言わない。ただ後悔はしないだね」

再び押し始め、みんなが待つであろう診断室に入った  
入ると案の定、俺の両親と薫の両親とケンの親父が居た

「さて答えを」

「はい」

俺は薫に視線移しまた茂さんに向ける

目を瞑り薫が話した昔話の続きを思い出す

「先に入れておこうよ」

薫はなぜか挙動不審だった

「そうだな…入れとくか」

互いに大事なもの（僕は空気の抜けたバスケットボールで薫は去年に撮影した3人で写った写真）を入れ、最後に手紙を入れた  
将来の夢を書いた紙をそれぞれ入れようとした時だった

《ブァー!》

勢いのある風が吹いた



「知ってるよ」

とうとう薫は座り込んで顔を俯けた

「18歳にならないと結婚できないんだよ?」

「そうなの?」

本当に驚いたのだろう

薫はすごい勢いで顔を上げてきた

「そうだよ」……………」

沈黙

「……………」

『ケン(ちゃん)早く帰ってきて(くれ)』  
心の中で神に…じゃなくてケンに祈る

だいたい僕はどうすればいい?

別に薫は嫌いじゃない

だからと言って結婚したいわけでもない

「僕まだ薫と結婚したいかわからない」

だからここは正直に素直な気持ちを言ってみよう  
だってここで言わないともう言うチャンスがないかもしれないから

……

「だから薫がまたこっちに帰ってきた時に僕が18歳で薫のことが好きだったら……」

少し言うか戸惑ったがそんな事言ってられない  
時間がないから……

「僕たち結婚しよう!」

言われたことがわからないのか薫はポカンとしていた

「か薫?」

「へ?」なんとも間抜けな返事だ

「結婚……」

「うん したい」

小指を立てる

「指きり」

「なんで?」

「約束だから」

小学生のくせに溜息をつく  
でも結局は小指を立て薫の小指と絡める

「指切りげんまん

」

指切ったと言うと同時に指を離す

「終わった？なら僕も紙とオカリナ入れるね」

いつから戻っていたのですか健太さん？！

しかもオカリナ入れるのかよ？！

「ほら埋めちゃおうよ」この後のことはあまり覚えていない

ブランコで遊んだ気もする………だがハッキリと思いつけない

唯一ハッキリと覚えているのは薫を見送る時に3人で泣いたことだ

## 第50話

目を開き、茂さんの眼をまっすぐ見る

「俺は薫を愛してます」

「それで？」

茂さんも目を逸らさず俺の目をまっすぐに見ている

「いずれ……薫と結婚させてください」

車椅子の上ではあるけれど頭を下げる

「ダメ」

「……………は？」

聞き間違いだよな？

うんそうに決まってる

「薫と結婚させてください」

「だからダメ」

「……………。」

空気が凍った



というより皆が固まった

数十秒たった

とととにかく理由を聞こう

「何ですか？」

「薫のこたえを聞いてないから」

「へ？私？」

へ？

何その理由は

「薫はどうしたいんだ？」

「私も拓也と結婚したい」

「じゃあタク君OKだ」

おいおい

なんか……あっさりとしすぎているぞ！

「よかったわね2人とも」

そして早紀さんは他人事だし……

「では次は私の出番だね」

久々にケンの親父登場  
いつぶりだろう？

「まず…拓也君の足の話なんだが……1つ質問するがもし手術で完全に、もちろんリハビリを含めてだが治ると言われたらどうしたい？」

足が完全に治る？

つてことは……

また走れる？

また飛べる？

また…バスケができる？

だったら……

「手術を受けます」

「それが北海道でも…かい？」

「それって……」

薫が言いたいことはわかる

『それはどうということ？』だ

「北海道に私の知り合いで世界でも有名な技術を持つ医師がいるんだ。ただ彼は有名なあまり忙しくてね……北海道のS市にある病院から離れられないんだ。ただ向こうにいるかぎり彼の治療を受けら

れる」

「期間はどのくらいかかるんですか？」

「短くても2年間だよ。その間向こうに住んでもらうことになる」

2年？

短くても？

「向こうには運のいいことに君達の通う学校の姉妹校があるし、火野さんと言う方が面倒を見てくれてもいいと言ってくれている」

「でもそれじゃあ……」

薫と離ればなれになってしまう

俺は薫がアメリカに茂さんと早紀さんと行くことに反対した  
なのに俺が北海道？

そんなことできない

「わかったかな？何で私が真田病院でこたえをだせと言ったかを。  
確かに私は君達が婚約をすれば薫を日本にのこしてもいいと言った。  
あとは自分達で決めなさい」

「俺は……俺はこの町に残ります」

走れないからなんだ？

飛べないからなんだ？

バスケットが……

「私はこの町に残って拓也を待つから」

薫の発言に驚いた

顔を横に向けると薫と眼があつた

薫の眼からは覚悟を決めたことがわかる

でも……

「俺は薫とずっと一緒に居たいから婚約したんだ。それにここでリハビリをすれば歩けるんだから」

「ダメ！北海道に行つて手術を受けてきて」

「でも……お前はずっと俺の帰りを待つのか？待ち続けれるのか？」

「待つよ。拓也を愛してるから……私は夢を叶えてもらいたい」

俺は驚きのあまり声を出せなかった

「その紙に書いてある拓也の夢を叶えてもらいたい！」

俺の手にはさつき掘り返したカンカンに入っていた紙がある

薫は知っていたんだ

これに書いてあることを……

## 第51話

「薫帰るわよ！」

瞳の機嫌がいいことが声でわかった  
と言うより朝からハイテンションだった  
何か良いことでもあったのかな？  
例えば朝茶柱が立ってたとか……  
ないね

「どど堂本先輩！」

教室のドア付近から私を呼ぶ声がした  
目をやると男子にしては背の低い可愛らしい顔の子がいた  
夏服の襟の刺繍された緑色のラインから2年生だとわかった

「薫なら彼氏がいる。帰りな」

元希の口から絶対零度の言葉が発せられる

「うっ……」

男子生徒は肩を落とし帰って行った

「何のようだったなんだろう？とか思ってるんでしょ？！」

後ろから私に飛びついてきた桜は元希から影響を受けたのか人の心  
を読めるようになっていた

「まあ……ね」

「薫…あの子は告白しに来たんだよ。それを元希が追いついたんだよ」

「おい健太…言い方が気に入らん」

「さあ皆帰ろうか？」

ケン（呼び方変えたんだ）は元希の声をスルーした

「健太」

「はいはい」

ケンは瞳に手を差し伸べ瞳はその手を握り歩き始めた

「ほい」

「えへ」

元希と桜もケン達同様に歩き出す

『いいなあ……』

心の中でそう呟いた

今私に手を差し伸べてくれる人はいない

1年半前は彼ら同様に私の愛する人が笑顔で手を差し伸べてくれてた  
そのことを思い出すと少し寂しい……  
ダメダメ！

寂しがらないって決めたんだから！

彼等を追いドアから廊下に出ると蒸し暑かった

「暑いなあ……」

高校3年生の私達のところに……

「薰早く！ダッシュ！！」

もうすぐ……

「待ってよお」

夏は訪れようとしていた

「みんなー！そっちは正門じゃないよ？！」

暑さにやられたのかな？

みんなが歩いてる方向は正門とは真逆の方向だった  
ようするに裏門に向かっていた

「いいから付いて来て！」

瞳に睨まれる

「……はい」

もちろんこれしか言えませんか（泣）

裏門につくと前に見たことのある長あぁぁい白い車があった

「さぁ乗って乗って。時間が押してるから」

『どういう意味だろう？』 と思いつつリムジンに乗り込み瞳の横に  
腰を下ろす

「出して」

瞳の合図とともに発車した

皆それぞれパートナーと楽しそうに話していたため私は外の景色を  
楽しむことにした

空は青くその所々に白い小さな雲が漂っていた  
空を眺め始めて20分も経つとさすがに飽きた  
私は鞆の中から1枚の手紙と少し1枚の古い紙を取り出し古い紙  
に書いてあるコトを読む読み始めた

『将来の夢はプロのバスケット選手になること』



これを見る度に彼を送り出したあの日を思い出す

次に手紙を読み返すのはこれで7回目だ

『薫…もちろん元気にしてるよな？俺は佐々木先生が驚くような早さで回復中だ。こっちの学校の連中ともなんとか仲良くやっていける。だけど時々無性に薫に会いたくなる……会ってこの手で思いっきり抱きしめたいという衝動に駆られるんだ。だから薫と再会した時は思いっきり抱きしめるから覚悟しとけよ？』

読み終え顔を上げるとみんなが私を見ていた

「そそいえば今どこに向かっているの？」

手紙の内容は皆知っている……訂正させてください  
勝手に瞳が見てみんなにバラしました

だから恥ずかしいので話題を手紙にもっていかれないようにしようと焦っているのです

「薫だけは秘密」

瞳……

暗に私以外みんな知ってると言いたいんでしょう？  
なんか虚しい……

「じゃ良いこと教えてあげる」

「え？」

落ち込む私に瞳は優しく言う

「薫に見せたいものがあるの」  
その発言と同時にリムジンは止まった

## 第52話

「あ！お姉ちゃんだ」

「え？」

リムジンを降りるともの凄いスピードで正面から私に抱きついてくる女の子がいた

「えへへ」

「えっ…と」

誰？

可愛らしい笑顔をこちらに向けてくるこの子……  
見たことあるような……  
ないような……

「お姉ちゃんこんにちは！」

前方から今度は男の子が………誰だっけ？  
誰か教えてえええ！！

「薫ちゃん久しぶりね」

「和子さん？！ってことは！！」

「あら？もしかして分からなかったの？」

ふふふと笑う和子さんは男の子の腕をとってこちらに見せてきた  
手首には小学生にはちよつと大きめの赤のリストバンドがしてある

「螢君と奈緒ちゃん？」

「「うん！」」

元氣いっぱいの人  
たった1年半でこんなに大きくなるとは……  
驚きです

「お姉ちゃん行こう！」

奈緒ちゃんはグイグイと私の手を引っ張る

「え？あ…ちよつと！どこに？」

小学生相手に動揺する私って……

ダメだね……

「いいからいいから」

「私たちも行くからって………時間!!」

私以外みんなハッ!とした表情になる

私は腕時計に目をやる

午後3時すぎ

「健太&元希!」

「承知!」

「へ?」

健太と元希はそれぞれ奈緒ちゃんと螢君を肩に抱え走り出した  
螢君は若干嫌がっている

「ほら薫も走る!」

桜に背中をたたかれ私も走り出した  
建物中に入ると歓声やら太鼓の音やら沢山の音が聞こえてきた  
階段を走って登りドアを勢いよく小学生を抱えた2人が開く

下ではバスケの試合が行われていた

「見せたいものってコレのこと?」

私の問いに瞳達は笑顔で頷く

「インターハイ2回戦だよん」

瞳の声の後に

《ガッン!》

という激しい音がした

さっきまで聞こえていた音どもは消え一瞬で静寂状態になった  
そんな中……

黒のユニフォーム…背番号18番を身に纏った1人の男がリングに  
片手でぶら下がっていた  
敵も味方も観客も啞然としていた

《ブー》

試合終了のブザーだろうか?  
とにかく音がした

男はリングから手を離しこちらに背を向けたまま着地する  
私はその男の後ろ姿に見覚えがあった  
右膝にはサポーターがしている

《ワー!!ワー!!》

《ドンドンドン!》

再びいろんなもの入り混じった音が出始める  
と同時に

「お姉ちゃん?!」

後ろから奈緒ちゃんの私を呼ぶ声があった  
私は走って階段を降りコートを目指した

「あ……」

私は瞳の言う『見せたいもの』の意味が今になって理解できた  
コート内で走り回りパスを受けシュートを決めている背番号１８の男

《ブー！》

機械のブザーの音がして次に審判がの笛の音がした  
選手全員が整列をして例をする  
今度こそ試合が終わったのだ  
ドアの横で私は待つことにした

なんて声をかければいい？などと考えながら

１人……

また１人とドアから人が出てきた  
そして……

「あ……」

１人の男が目の前で立ち止まった  
右膝にはサポーター……  
背番号１８……

急に視界がボヤケた

「泣くなよ」

彼は困ったような笑顔で私の頭を優しく撫でる

「だっ……て……」

「薫……」

「な……に？」

頑張って泣くのを止め返事をする

「ただいま」

その一言で私は完璧に泣き止み笑顔になる  
そう……

ずっとコレを言える日を待ち望んでいた

「お帰り拓也！」



## 最終話（前書き）

今までお付き合いいただき……ありがとうございました（Ｔ＾Ｔ）

## 最終話

薫を後ろから抱きしめてから何分経ったんだろう？

わからない……

だけど幸せだ

ふと薫の胸元に目をやるとハート型のネックレスが、指に目をやると前にプレゼントした指輪とは違うシルバーの指輪がしてあった次に自分自身の指に目をやる

薫と同じ指輪がある

「ちょっと！何時までそうしているつもり！」

おっと

閻魔大王のご登場だ

まあ此处教室だしね（笑）

「雪が降ってきそうなんだから早く帰るわよ」

「「はあい」」

『僕たち幸せです』オーラ出しまくりますけど何か問題でも？

「拓也」

微笑む薫に手を差し伸べる

「えへへ」

ぎゅっと握って歩き出す

握る度に思ってしまう『もう寂しい思いはさせない』と

薫からこの一年半の寂しがったことの1つにコレが入っていたから  
ななんだけどね……

俺がこの町に帰ってきて5ヶ月経った

インターハイは3回戦敗退で終わってしまった

そして引退が決まってすぐにこっちに帰ってきたのだ

古くも新しくもないアパートのとある部屋の前で立ち止まりポケッ  
トから鍵を出し扉を開ける

「「ただいま」」

返事はない  
当然だ

ここは俺と薫の家なのだから  
家に入りストーブのスイッチをオンにする

「薫……」

「なあに？」

今度は正面から抱きしめキスをする

「俺すげえ幸せ」

「私も」

俺はまだ生まれてきて18年だ

でも残りの人生を共に過ごす愛する人が側にいる

幸せだ

大切な人達が俺と薫の結婚を心から喜び祝ってくれた

幸せだ

薫と手をつなぐこと

薫と話をする事

抱きしめること

その1つ1つが幸せだ

だから心からこう思い、言葉にできるんだ

「愛してる」

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8545c/>

---

RAN&JUMP

2010年10月9日03時00分発行